
魔法少女リリカルなのは ～求めし非日常～

ヌコさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは　　く求めし非日常く

【Nコード】

N9548L

【作者名】

ヌコさん

【あらすじ】

主人公は道場に住む天涯孤独の少年・神谷 周平
少年は平和で退屈な日常に飽き飽きしていた。周囲の人間を遠ざけ、非日常を求めた。そして、彼は出会う。
『魔法』という非日常に……………。

本作品における魔法について

魔法は「気」をリンカーコアを媒介に魔力に変換。

それを用いて魔法というプログラムを発動させるという考え方です。

しかし、「気の総量が多い人」≡「魔力量の多い人」ではありません。

「気」がリンカーコアで魔力に変換される際の変換効率で魔力量が決まります。

1の「気」から1の魔力が作れる人と1の「気」から2の魔力が作れる人。

この違いです。

つまり、リンカーコアの変換効率が良い人が魔力量の多い人という見方になります。

ちなみに、主人公はジュエルシードの魔力で取り込んでパワーアップしましたが、

魔力を魔力として運用しているだけで魔法適正はないため魔法は使えません。

(原作でいうところのStrikerSでなのはとフェイトがエレベータシャフトを

掴んで滑り降りていたときと同じような使い方)

しかもリンカーコアがないため、放出系の技を使えば当然総量が減ったまま回復はしません。

[illegible]

とりあえずはこんな解釈になります。

追記があればのちのち増やしていきます。

主人公設定（前書き）

話の大筋はできてるのに最後がうまくまとまりません。

なんと小説の難しいことか……。しょっぱなからすいません。

ということで今回は主人公についてです。本編でちゃんと書いてなかつたので、まとめて見ました。

主人公設定

神谷 周平

聖祥大付属小学校・三年生

身長…148cm

体重…38kg

髪の色…黒

瞳の色…グリーン

性格…どちらかといえばクールだが、意外とジョークが好き。

世話好きで困っている者（別に困ってなくとも）を放っておけない。

生粋のバトルマニアで強い相手と戦っているとテンションが上がりすぎて暴走することも……

「目には目を、歯に歯を」が基本で、良くも悪くもやられたらやり返す。

自分に厳しく、他人に優しく。男に厳しく、女に優しく、そして、男に厳しい（大事なことなので2回言いました。）ジェントルメン。

特技…家事全般（一人暮らしの必須スキル）

武術（主に無手、槍、弦、投擲などが得意。剣術はやや苦手のため毎朝練習している。）

趣味…音楽（聴くのも演奏するのも。）

ゲーム（アクション、シューティングが好き）

体を動かすこと、スポーツ（とくに野球好き）

テーブルゲーム（とくに麻雀好き）

散策（強者を求めて歩き回ること）
意外と多趣味だったりする。

好きな言葉…『人生適当』

略 歴…海鳴市にある神谷流道場に生まれ、6歳の時にはすでにその全てを極めていた鬼才。

丁度、両親はそのときに他界。両親の友人が後見人となってくれているが、現在は一人暮らし。

本人は気にしていないが、そのことで周囲に心配されることを嫌う。

平和で退屈な生活に飽き飽きしていて、何かを求めるように毎日散策している。

神谷流…無手に始まりあらゆる武器を使った武術。

朱雀・白虎・青龍・玄武に分かれていてそれぞれに特徴がある。

朱雀…突撃力、破壊力を重視したパワータイプ

白虎…瞬発力、連打を重視したスピードタイプ

青龍…‘気’の操作を重視したテクニクタイプ

玄武…身体強化、防御、カウンターを重視したディフェン

スタイプ

これらの他に奥義である「黄龍」がある。

2000PV突破記念特集

ヌコ「2000PV突破じゃあ~~~~!!」

シーーーーーン

ヌコ「リアクションしてくれる人がいないと寂しいので、とりあえず主人公に来てもらいましょう。あま〇つ~~~~!!」

神谷「誰があ〇たつだ。しょうもないネタはやめときなさい。」

ヌコ「よいではないか。ネタは分かりやすさがイノキだぞ。」

神谷「普段分かりにくいネタ使ってる奴のことじゃないね。ちなみにボンバイエは『頑張れ』って意味らしいよ。」

ヌコ「ドシタヨ。テンションヒクイヨ。」

神谷「まあな。とりあえずこの特集について言いたいことがある。」

ヌコ「くるしゅうない。申してみよ。」

神谷「2000PV突破ってすごいのか？」

ヌコ「身も蓋もないよ!!それいい始めたら企画倒れもいいところだよ!!ちなみにすごいかなんか分らん。とりあえず切がよさそうだから調子に乗ってみただけだお。」

神谷「適当だな。そんなだから亀更新になるんだ。やる気出せ!!」

ヌコ「むりぽ。」

神谷「なんという体たらく！なんとも書き始めただけのバカではその程度ということか。」

ヌコ「余計なことはいっちゃめくく！！。」

神谷「いや言わせてもらおう。なんともネットサーフィンしててこのサイトを見始めたのが今年の5月。なんとも書いてみたくなつてこの小説を書き始めたのがその1ヵ月後。そしてなんの考えもなしに適当に構想ねって今まで書いてきたわけだろ。」

ヌコ「ひどー！！一応考えてるよ！！まあ最初はstrickers書きたくてやってみようかなとか思いつつせつかくなら無印からっていう好奇心が……。」

神谷「つまり考えてたのはstrickersからで現在のシナリオは行き当たりばったりな訳だな。」

ヌコ「否！これでも一応そこはかとなくおそらく多分きつとそれとなくシナリオの大筋は纏まってるはず……。無印終了までだけ……。ちなみにお弁当はおいしいものを最後に残しておくほうなんだ。」

神谷「言いたくはないがあえて言おう。阿呆が！！どうせ無印から書き始めた理由も『わくく！ようし、よ！ようし、よ！』とかそんなもんだらう？」

ヌコ「Yesロリータ！Goタッチ！」

神谷「一文字違うだけで大惨事だな。（p i p i p i）あっ！警察ですか！ここに犯罪者が…」

ヌコ「待ってくれ！！通報されるくらいなら自首する！！」

神谷「否定しない予想外の展開！！？」

ヌコ「迷言を借りれば『ロリが好きなんとちゃうで。ロリも好きなんやで。』というヤツだ。」

神谷「ゴミ虫が！！」

ヌコ「はっ！！ドMだからナニ言われても痛くもかゆくもないのだ。」

神谷「聞きたくもないことカミングアウトするな！！……はあ。もういい。最後に1つだけ言わせてもらおう。」

ヌコ「これだけボロクソいってまだあるのか！！？」

神谷「読者の皆様の声を代弁してやる。こんなとこでだべってる暇があるなら本編進める糞虫！！」

ヌコ「サーセンorz」

第一話 邂逅（前書き）

ども。初投稿…というか処女作です。文章力のない未熟者ですが、生暖かく見守っていただければと思います。作品の誤字やご意見、ご感想いただければ幸いです。

週一位で更新できるようにしますので、よろしくお願いいたします。

第一話 邂逅

平和

ルヲ。ルヲ。

(1) 戦争もなく世の中が穏やかである・

いふ。おれは。

(2) 争いや心配事もなく穏やかである・

外”
はある。

それは万人が望むもの。しかし何事にも”例

これはその”例外”である少年の物語

[illegible]

第一話
邂逅

シ
ユ
ツ
シ
ユ
ツ

と子気味よい音が響く。室内には竹刀を振るう黒髪で碧眼の少年が一人。

少年の名は神谷 周平。今は朝の日課である鍛錬の最中である。

『神谷流道場』

それが周平の家であり、自身を練磨する場所だった。

神谷家は古くは医術の家柄で、自らの、あるいは相手の『氣』を操ることであらゆる怪我や病を治療した

という。その力は人を治すためだけではなく、壊すためにも使われてきた。それは無手の流派のみならず

時代に合わせさまざまな武器格闘も可能となり進化していった。後に医術よりも武術が重宝されたため道

場という形で現代に残っているわけだが……。最近は簡単な護身術を身につけるための道場となっていた。

しかし、二年前に師範であった両親が亡くなり、門下生は去り、道場は閑散としていた。

「ふうっ」

一息つき時計を見て、周平はまた「ふうっ」ため息をついた。

「しゃ～ね～な。学校行くか。」

”学校”それは神谷周平にとって『退屈な日常』だった。

周平が通うのは私立聖祥大付属小学校。現在三年生。

仲のいい友達……というより友達らしい友達はいない。

これは入学当時両親が亡くなったため学校どころではなかったということもあったが、周平自身友達がほ

しいと思ったことがなかったの、最低限の会話しかしてこなかったためだ。

[illegible]

神谷 Side

教室に入り席に着く。窓際の一番後ろの席。

（つまねゝな。）

ボツと外を見ていると

「神谷君。」

ふと声をかけられ顔を上げると金髪の美少女がいた。

「なんだい委員長？」

僕に声をかけたのは学級委員のアリサ・バニングスだった。彼女は、孤立している僕によく世話をやい

てくる。頼まれたわけでもないのに、ご苦労なことだ。

「先生に昨日の国語の宿題回収して来いって言われたのよ。」

朝から面倒事を押し付けられたせいかな若干不機嫌なようだ。それでも断わらずに引き受けるのだから真

面目というかなんというか。伊達に委員長はしていないな。

「ほい。宿題。」

「Ok……ってこれ白紙なんだけど？」

「白紙じゃない。名前書いてるだろ？」

「ちゃんと書いてきなさいよ！！こんなの出したら怒られるわよ！！」

なにやら心配してくれているようだが、

「怒られたところで殺されるわけでもないし、痛くもかゆくもないぞ。」

アリサは、ため息をついてあきれているようだ。

「まあいいわ。このまま出しとくから後で先生にたっぷり絞られなさい。」

いろいろ諦められたようだ。当然といえば当然だけど、僕には関係ない。

（体格差がある。どうするか…殺すような業ワザを使うわけにもいかな
いしな。

とりあえず力の差をみせるか。）

『玄武ノ壺 鉄甲陣』
テッコウジン

少年は大きく深呼吸し、体中に『気』を巡らせる。神谷流の基礎
である気の操作による剛体法だ。

（これで殴っても痛くない。さっさと終わらせるぞ。先手必勝！！）

相手の懷に飛び込み、鳩尾に突きを叩き込む。男は悶絶し撃沈。

（まず一人。さあ、これで逃げてくれれば手間がない。）

「ヤロー！！なめやがって！！」

残った男が激昂して殴りかかって来る。

（チッ！馬鹿の考えることはわからん！！仕方ない、少し痛い目に
遭ってもらうか。）

相手の拳を外側に払い受け流すと同時に気を指先に集め相手の肩
口に突きを放つ。

『朱雀ノ参 喙』
カイ

突きが入ると同時に相手に相手に気を叩き込む。

「ぐあああああ。痛えええ」

肩を抑えて蹲り、のた打ち回る。

（加減はしたから外れただけだが。ああ、そんなに動くと悪化するぞ。）

相手の心配をしながらため息をつく。

（つまんねくな。こんなもんじゃ全然たりねえよ。）

そう、少年は求めていた。

平和を打ち壊す混沌を……。

血沸き肉踊る命がけの闘争を……。

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15
16	17	18
19	20	21
22	23	24
25	26	27
28	29	30
31	32	33
34	35	36
37	38	39
40	41	42
43	44	45
46	47	48
49	50	51
52	53	54
55	56	57
58	59	60
61	62	63
64	65	66
67	68	69
70	71	72
73	74	75
76	77	78
79	80	81
82	83	84
85	86	87
88	89	90
91	92	93
94	95	96
97	98	99
100	101	102
103	104	105
106	107	108
109	110	111
112	113	114
115	116	117
118	119	120
121	122	123
124	125	126
127	128	129
130	131	132
133	134	135
136	137	138
139	140	141
142	143	144
145	146	147
148	149	150
151	152	153
154	155	156
157	158	159
160	161	162
163	164	165
166	167	168
169	170	171
172	173	174
175	176	177
178	179	180
181	182	183
184	185	186
187	188	189
190	191	192
193	194	195
196	197	198
199	200	201
202	203	204
205	206	207
208	209	210
211	212	213
214	215	216
217	218	219
220	221	222
223	224	225
226	227	228
229	230	231
232	233	234
235	236	237
238	239	240
241	242	243
244	245	246
247	248	249
250	251	252
253	254	255
256	257	258
259	260	261
262	263	264
265	266	267
268	269	270
271	272	273
274	275	276
277	278	279
280	281	282
283	284	285
286	287	288
289	290	291
292	293	294
295	296	297
298	299	300
301	302	303
304	305	306
307	308	309
310	311	312
313	314	315
316	317	318
319	320	321
322	323	324
325	326	327
328	329	330
331	332	333
334	335	336
337	338	339
340	341	342
343	344	345
346	347	348
349	350	351
352	353	354
355	356	357
358	359	360
361	362	363
364	365	366
367	368	369
370	37	

男たちを片付けて路地を出で、家路に着く。

（今日も収穫は無しか。）

少年は落胆していた。しかし、少年は見つける。

前方から猛スピードで車が通り過ぎる。よく見ると車内には見知った顔の少女が拘束されていた。

（今のは委員長か？白昼堂々誘拐かよ。いや夜だから白昼じゃないのか？）

くだらないことを冷静に考えながらも少年の表情には動揺がない。それどころか、新しい玩具を見つけ

た子供のような無邪気な笑みを浮かべていた。

「おもしろく。なかなか楽しめそうだ。」

少年は、車を追いかける。その動きは常人のそれではない。そして相手の行き先を予想する。

（あの方角なら行き先は、埠頭の倉庫か廃ビルだな。だが廃ビルの周辺は人通りが多い。なら……）

思考を止めて、動き出す。

（さあ、楽しませてくれよ！！）

[illegible]

埠頭の倉庫。不審な車が一台。見るからに怪しい黒服が3人。その場に似つかわしくない少女が1人。

そして……忍び寄る少年が1人。

（ビンゴ!! さすが誘拐犯。行動がわかりやすいね）

歓喜しながら相手の戦力を把握する。

（とりあえず3人か。中にもいる可能性があるが周囲に車はない。おそらく奴等で全員か？でも後から来

る奴がいるかもしれない。油断はできないか。人質をとられたらOUTだからな。）

考えているうちに黒服たちが倉庫の中に入っていく。

（さて、どこから入るか？さすがに正面は警戒してるだろうし…）

周囲を見渡してみるがほかに入り口らしいものはない

（チッ！となるとやっぱり上しかねーか。）

少年は舌打ちするが、その表情はどこか楽しんでいるかのようだ。

— — —
— — —
— — —
— — —

《Side アリサ》

「んう…」

目を覚ますと薄暗い部屋の中だった。体が動かない。手足を縛られている。

「起きたか。気分はどうだい？アリサ嬢？」

顔を上げるとあからさまに怪しい黒服がいた。突然のことに混乱する。

（何これ？え〜と学校終わった後すずかと塾に行って、少し遊んでから帰るからって迎えの車断ってか

ら。遊んでたすずかと別れてそれから〜……）

そこで記憶が途切れていた。

（これってやっぱり誘拐？）

何度も誘拐されかけたことはあったが、本当に誘拐されたのはこれが初めてだった。だから、こんな状

況になってもまだどこか現実感がなかった。

「そういや身代金いただいた後はどうすんだ？」

男の一人が問う。

「まあバラしてもいいが、もう少ししたらいい女になりそうだしその手の店にで

も売ればまた金になるだろ。」

（うそでしょ。やだ怖い怖い怖い怖い怖い。誰か助けて。パパー！！
ママー！！）

《Side 神谷》

天窓を突き破り、着地と同時にアリサの近くにいた男を撃破する。
身体強化により無傷で着地できた。

（よし！きれいに入った！あれならタフな格闘家でも失神KOだな。
）

確認するまでもなく、男は泡を吹いて痙攣。完璧に失神していた。
「なっ何だこいつ！！？」

男たちは驚愕していた。当然だ。優に10mはある天井から人間
が飛び降りてきたのだから。

（隙だらけだZE☆）

男たちの動揺が収まる前に一気に距離を詰める。

（ソッコーで決める！！）

『白虎ノ壱 シュレンソウ 瞬連爪』

両手に気を集中。高速の8連撃で文字通り八つ裂きにする。

（あと一人！！）

もう一人の男は身構えたが、すでに手遅れだった。

『白虎ノ弐 ソウガ 双牙』

飛び膝で浮き上がった頭に鉄槌を叩きつける。

(目標、完全に沈黙……ってかww)

《Side Out》

—
—
— —

周囲を警戒しつつアリサに目を向ける。突然の事態について来られずポカンと

口をあけたまま固まっていた。

「おーい。大丈夫かー。戻ってこーい。」

緊張感の欠片もなく話しかける。

「あっうん。大丈夫。ありがと……!!」

少年の顔を見てアリサは驚愕した。

「かかかかっ神谷君!!? なっ々な何で!?!」

「なんでと聞かれたら答えねばなるまい。特に理由はないが、如いて言えば退屈だったから?」

「いや、聞き返されても困るんだけど。……あなた何者よ!?!」

「ハジメマシテ。カミヤシユウヘイデス。」

「……もういいわ。」

呆れられた。

「あつそ。じゃあ用事も済んだし僕は帰るよ。」

「ちょ!! 待ちなさいよ!!」

声をかけたがそこにはすでに少年の姿はなかった。

(何なのよ、
いっ
たい?)

疑問ばかりだったが、気の抜けたやり取りのせいか誘拐されたこと
の恐怖は霧散してしまっていた。

[illegible]

（違う。まだだ！それでもまだ足りない！！もっと！もっとだ！！！）

戦っている最中は楽しめた。だが、やはり違う。足りないのだ。

決定的に。何か。

そんなことを思いながら歩いていると、突然近くで凄まじい気の

(デケゝ気だ!! 寒気がする!!)

今までに感じたことのない感覚に少年は恐怖し、同時に歓喜した。

(おもしれゝ!! 逃がさねゝぞ!!)

力の奔流を辿って行く。そこにいたのは『異形』だった。定まった形がなく、ぐにやぐにやと脈動する

薄気味悪い黒い影があった。

t o b e c o n t i n u e d

第一話 邂逅（後書き）

今作のコンセプトとして主人公は魔法を使いません。（じゃあ何で魔法少女ものなの？という突っ込みは無しの方でww）

魔法でO☆H A☆N A☆S Iしない代わりに漢は拳で語ります！！

最終的にヒロインを誰にするかはまだ悩んでますが、ハーレムエンドにはしないつもりです。（もちろん理由は作者が暴走するからですw）

自分でも、このさきどうなるかわかりませんが次回もよろしくお願ひします。

第二話 力（前書き）

いまだにプロローグみたいでぐだぐだな展開になってしまいました。
なんてこった！どうしてこなった！バンナソカナ！って感じですが。
なんとか頑張って逝きたいとおもいます。

（速い！！）

少年は驚愕するが、身を翻し紙一重で避けるとすぐさまバックステップ。

（接近戦はやバイか！？）

相手のスピードに自分が不利と判断し、距離を取ると掌を掲げ反撃の一撃を放つ。

『青龍ノ壺 息吹』

イフキ

衝撃波の後を追うように一陣の風が吹き、化け物に直撃する。所謂『遠当て』だ。

だが、化け物は怯む様子もなく突っ込んできた。

（チッ！マグロか！こいつは。）

反射的に身構え、防御する。

『玄武ノ式 流水陣』

リュウスイジン

前方に気の流れを作り、突撃を受け流す。化け物が突っ込んだ隙が跡形もなく吹き飛び、あたりに粉塵

が立ち込める。

（おいおい！こんなのまともに喰らったら死ぬぞ！）

相手の攻撃の破壊力に舌を巻きながら、第二波に備える。しかし……

（しまった！見失ったか！？）

煙が収まるとそこに化け物の姿はなかった。周囲を確認する。

（落ち着け！相手の気を辿れ！……後ろ！！！？）

振り向くと化け物の一撃が迫っていた。

（回避間に合わねえ！受けるしか……）

とっさに気を集中させる。が、脇腹に挟り込むように鋭い一撃を受け吹き飛ばされる。

「がはあああ！」

10mほど飛ばされ、コンクリートの地面に転がる。

（ヤベェ！肋骨を二本もっていかれた！？）

ダメージを確認する。

（出血もひどい。もって三分ってどこか。光の巨人かよ。）

深刻なダメージに多少の焦りを覚えるが、それでも相手を倒すために思考を止めない。

（遠当てはまったく効いた様子がない。溢れ出すような気。今まで

見たことがない流れだ。）

そう、通常生物の気は体中を循環するように流れている。しかしこれには一定の流れがな

く、体の中心から溢れ出しているようだった。

（賭けてみるか！核があるならそこを狙う！）

突貫する。防御は考えない。自分にできる最大、最速の一撃を放つ。

『青龍ノ参
ソウリュウメツバ
蒼龍滅波』

拳に全力を込め力任せに叩き込む。

「ブチ拔えエエえー！ー！ー！ー！！」

一気に中心まで突き抜け、気の発生源を引き抜く。

すると、化け物の姿は掻き消えた。だが、手の中に残ったそれはいまだに力を放ち続けている。

（なんだこれ？宝石か？って考えてる場合じゃねえ！こいつを抑え込まねえと！）

凄まじい力の奔流。迸る力に全身が悲鳴を上げ、腕を飛ばされそうになる。

（なめんじゃねえぞ。こんぐらいの力。掌握してみせる！！）

少女は驚愕していた。目の前で起こった出来事に。

（【ジュエルシード】を素手で封印した!!?）

信じられなかった。ひとたび暴走すれば魔法による封印処理が必要なはずが、その少年はそれを素手で

やってのけたのだ。

（あの子は一体??）

疑問を抱きながらも少年に接近する。よほど疲弊しているのか座り込んでしまっている少年だがその顔

には笑みが浮かんでいた。

（いくよ。バルディッシュ。）

（yes, sur.）

少年の背後を取る。以外に警戒心はないようだ。

「動かないで。」

サイスフォームのバルディッシュを突きつけ動きを拘束し、声をかけると少年はこちらを見る。そして

なぜか呆然とした表情でこちらをみて固まった。

（ん？何だろう？反応がない？）

「綺麗だ。」

突然、少年が呟く。

「なっ　な　な　な　な　！　！」

予想外の言葉に動揺を隠せない。おそらく顔が真っ赤になっているだろう。

（いま何ていわれた？綺麗って？なにそれ？）

混乱していると

「かっ　かわいい　！　……だ　と　？」

「@☆◎▽！＃＼？」

（なんなのこの子？）

少女は完全に動揺していた。同世代のそれも男の子に「綺麗」とか「かわいい」などと言われたことが

なかったからか。早い話そういうことに免疫がなかった。

「神谷周平。キミの名前は。」

混乱しているこちらをよそに唐突に微笑みながら少年が問う。

「フェイト・テストロッサ」

何故か武器を突きつけたまま自己紹介という妙な状態。

動きを封じている相手に主導権を握られっぱなしだった。

「OKフェイト。それじゃあ本題だ。僕に何か用があったのかい？」

急に真剣な顔で少年が聞いてきた。その雰囲気はフェイトの冷静さを取り戻す。

「キミの持ってるジュエルシードを渡してほしい。」

「ジュエルシード？」

少年は首を傾げる。

（嘘をついてるようには見えないけど…）

「さっきキミが倒した化け物から出てきた宝石。」

「あああれか！ん？あれ？」

ふいに少年が悩みだす。

「早く渡して。できれば手荒なことはしたくない。」

決して綺麗とか、かわいいとか言われたからではない……と思う。

「いや、渡したいのは山々なんだが……」

また悩みだす少年。

「何？」

「単刀直入に言うとおえた。スーーーーファイーーーーですね。わかります。」

「???」

急に何を言ってるんだろう？どうやらちょっとアレな人のようだ。

（あれ？でもジュエルシードの反応が消えてる？）

「じゃあ。用も済んだようなのだ僕はこれで帰ります。よい子は寝る時間だゾ☆」

ちょっと寒気がした。やっぱりアレな人のようだ。などと思っている間に少年が歩き出す。

「ちょっとm【フェイト！もうひとつみつけた。】アルフ？」

少年を止めようとするや突然念話で呼びかけられた。

使い魔のアルフがもうひとつジュエルシードを捉えたようだ。

（ジュエルシードに関わってるなら、また会うことになるかな？）

とりあえず今はもうひとつの方を優先することにして少年を見送った。

（気の量もいままでの比じゃねえ…。わけわかんねえが…怪我治ったしいいか？）

考えても始まらないと思い、別のこと、フエイトのことを考えることにした。

（しかし、完全に飛んでたよな？あいつ？鎌みてえなのも持ってたし……）

考えているうちに家に着き、とりあえず保留することにした。

（今日は疲れたし、疑問は全部明日だ。）

思考を投げ捨て眠りにつく。力を手にした少年。その行き着く先は……。

t o b e c o n t i n u e d

第二話 力（後書き）

この作品では、無印を第1章・A・Sを第2章・StSを第3章として書くように思っています。この第1章では原作の大筋にはそれほど関わらず、本格的な原作レイプは第2章からになる予定です。これからの展開としては『日常と一握りの非日常』になるか思います。

第三話 規律正しい混沌（前書き）

今回は少年のぐだぐだな日常です。

戦闘時よりコミカルな感じで書いてますが、マジで変です。

うまくかけません。なしてでしょう？

タイトルで作者の趣味がわかってしまいそうですが、わかる人はい
るのか？

第三話 規律正しい混沌

化け物と殺しあった翌日。何事もなかったかのようには少年は日常に帰還していた。

神谷（今日は妙に体がかりいゝな。）

少年の朝ははやい。5時起床。新聞を読みながらコーヒーを飲むのが朝の日課。

おっさんくさい事この上ない。

神谷（昨日の怪我。治ってるけど気味わりいし。学校の帰りにでも一応先生に診てもらっておくか。）

などが、
などと考えながらドリップして、お気に入りのカップを手取る。

パ
リ
ン
ツ
！
！

取っ手が取れて、朝から聴きたくないであろう快音とともにカッ
プが割れる。

朝から幸先の悪い。

「はあ、不幸だ。」

[illegible]

第三話

システマティックケイオス
規律正しい混沌

少年は道場へ向かう。これも毎朝の日課となっている剣の鍛錬のためだ。

なぜ剣の鍛錬をしているかといえば、少年は剣が苦手だった。

免許皆伝どころか稽古を始めて一月もしないうちに師である

両親が亡くなってしまったからだ。

加えて言えば、剣を振る感覚がつかめずにまだ基礎中の基礎

しか習っていない状態だった。

よって少年の剣技は、神谷流1割・我流9割と実に半端なものとなっていた。

軽く柔軟をしてから竹刀を握る。

構えは上段。天に伸びるような美しい構え。

神谷「破アッ！」

気合とともに思い切り打ち下ろす。

いつもより鋭く振れた感覚。

だが次の瞬間信じられないことが起きた。

ガシャーーーーーン！！！！ドーーーーン！！！！バキバキ！！グシャ！！！！

神谷「……………」

窓ガラスが粉碎。

振り抜いた先の床が陥没。

神棚？がばらばらになりながら転落。

おまけに木造の壁が吹き飛び、外から鳥さんがこんにちわしている。

神谷「なんじゃこりゃ～～！！！」

その叫びは、町内中に響いたそうだがそんなことは誰も気にしない。

しばらくして冷静になった少年は、自己分析を始めていた。

神谷（どうしてこうなった？たしかに今日は調子がよかったが、建築物を破壊できるとは思わなかった。）

神谷「ん？」

ふと少年は、今朝のことを思い出していた。

神谷（カップ……大して古いわけでもないのに割れてたな？ “力” 入れすぎたか？）

集中して自分の氣の流れを把握する。

それはいつものように規則正しく体中を巡っていたが、

今までとは比べ物にならないほどの力だった。

まるでダムが決壊した川の流れのように…。

神谷（今までも普段は力を抑えるようにしてたが、今まで通りじゃ駄目か？ もっと力を抑えねえと。これじゃ人に触っただけで殺せちゃうな。）

多少大げさかと思うが、少なくとも怪我を負わせてしまうことは間違いなかった。

無意識とはいえカップを破壊してしまうくらいの力がかかれば、常人の防御力なら骨折してしまってもおかしくはない。冗談ではなく、

当たり所が悪ければ、楽に死ねるだろう。

神谷（この年で犯罪者になるのは御免こうむる。）

最大限力を抑えて、少年は鍛錬を続けた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

アリサ「ちよつと神谷君。」

学校に行くと急に声をかけられた。アリサ嬢に。

アリサ「昨日のことなんだけど……」

少年は失念していた。一人の少女を助けたことを。

アリサ「とりあえず……あつありがとう。」

神谷（なんてこった！これが噂に聞く【フラグ】ってやつか！なんて厄介な！）

助けたときは適当にスルーすればいいかと考えていたが、

どうやらそれは不可能な雰囲気だった。

アリサ「ちよつと！！無視すんじゃないわよ！」

逃げ道を探していたが、どうやら退路は断たれてしまったようだ。

神谷「いやすまん。なんでいきなりありがとうなのかわからなくて困惑してた。」

騒がれてヒーローになるのは勘弁願いたかったので無理やりスル

見世物

ーすることにした。

アリサ「だから昨日…」

神谷「昨日？」

まさか教室で「昨日誘拐されました。」などとは言わないだろう
と考え、

しらを切り通そうとしたがそれが完全に裏目に出た。

アリサ「だから！昨日私を誘拐した奴等をボコボコにして助けてく
れたことよ！！」

ざわッざわッざわッざわッざわッざわッざわッざわッざわッざわ

教室中がざわつく。

神谷（ミスったな。にしてもなんだこの空気は。カ○ジか○カギで
もいるのか？）

どうやら全員に知られてしまった。見世物コース確定だった。

神谷「頼むから大声出さないでくれ。注目されるのは嫌いだ。」

結局、観念すること…。

アリサ「ご、ごめん。でもありがとうって言ってるのに無視された
ら嫌でしょ。しかもアンタ、しらばっくれようとしたでしょ。」

まさに正論。言い返せる訳も無し。

神谷「だから、目立ちたくないんだ。おそらくこの後執拗な尋問質問タイムになるんだろ。が僕は逃げるぞ。本気で！全力で！」

ただでさえ普段人と話すことなどないのに一方的な筆問などものはや尋問だった。

アリサ「ふーん、まあ頑張って逃げなさい。あーよかったらお昼は一緒に食べよ。ちゃんとお礼もしたいし。」

どこまでも律儀な奴だと思いつつも、

少年の頭の中はどうやって逃げるか考えるのでいっぱいだった。

結局、包囲され質問攻めに合い、昼休みにはすっかりアリサに拉致された。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

アリサ「じゃあ知ってるかもしれないけど、私の友達を紹介するからね。」

当然知っていたし、知らないほうがおかしいだろう。同じクラスなのだから。

神谷「はあー。ヨロシクオネガイシマス。タカマチサン。ツキム

ラサン」

なのは「にやはは。よろしく、神谷君。」

すずか「よろしくね。神谷君」

アリサ「何で片言なのよ!？」

神谷（おお〜!これがツンデレのツツコミか!!見事な切れだ。）

意味もなく感心する。

神谷「特に意味はないが、あえて言えばなんとなくだ。」

アリサ「ほんとに意味ないわね。」

呆れられた。

最近、呆れられることが日常化してきているのは気のせいではないだろう。

なのは「そういえば、アリサちゃんを助けたって言ってたけどどうやって助けたの?」

すずか「そうだよね。相手は大人だったんだよね?」

神谷「殴って、蹴って、潰した。以上。」

簡潔に答えた。これ以上ないほどに。

アリサ「たしかにその通りなんだけど…こいつ天井から降りてきたのよ。」

天井といってもどこのことか二人はしらないため、

なのは「天井って？」

という質問がでた。

神谷「海沿いにある倉庫の天井。」

すずか「あれって結構高いよね？」

神谷「たいしたことないぞ。ほんの15, 6mだし。」

当然のように答える少年に皆、驚愕している。

アリサ「アンタ人間？」

アリサは何気に失礼なことを言う。

たしかにそんなことのできる人間などそうそう居ないだろうが…。

神谷「じつは僕…人間じゃないんです。」

みんな「「……………」」

神谷「アレ？ツツコミは？」

アリサ「いや意外とマジなのかと思って…。」

神谷「ヒド！こんなでもまだ人間は辞めてないぞ！」

みんな（（まだなんだ。））

皆の考えがシンクロした瞬間だった。

同時にいくつか辞めるんだろうとも思っていたのは秘密だ。

そのあとに適當な世間話をしてすぐに皆と別れた。

[illegible]

学校の歸りに病院によつた。

一応、検査のためと、まああと顔見せかな。

海鳴大学病院。

おそろく海鳴で一番大きな病院だがそんなことはどうでもいいか？

院内に入り、すれ違う看護士さんたちに挨拶しながら休憩室に向かう。

神谷「おつかれさま。先生。」

休憩室に居た女性に話しかけた。

「あれ、めずらしいね。」

この人は石田幸恵さん。この病院の医師であり、戸籍上僕の母になる人だ。

両親が死んでから親戚をたらい回しにされるといふありきたりな展開にあっていたところを、母の友人

であった石田先生が引き取ってくれた。今普通に生活できているのはこの人のおかげだ。独身貴族万

歳！！といって殴られたのはいい思い出だ。

ちなみに、僕は道場を使うためにもともと住んでいた家にいるため一緒には住んでいない。

石田先生「今日はどうしたの？」

神谷「いや、たまにはかわいい息子の顔でも見せてやろうかと思つてね。」

石田先生「ぷっ、あはははっ！！」

神谷「なぜ笑うし！？」

石田先生「ごめんごめん。なんかおかしくなっちゃって。で、ホントは何しにきたの？」

神谷「顔見せに来たのはホントだけど、ついでに健康診断でもしてもらおうかな。」

石田先生「まあいいけど、どこか悪いの。」

神谷「どこか悪いなら健康診断じゃなくて診察だろ。」

昨日のことをそのまま話して、

K I ☆ T I ☆ G A ☆ I

だと思われるのは嫌なので、とりあえず検査して問題なければ

ジュエルシードのことは放置してもいいかと思っている。

とりあえず、検査の結果は以上なしだった。

石田先生「でも、体には気をつけてね。私一応あなたの母親なんだから。」

神谷「大丈夫だよ。それより母さんこそ気をつけてよ。医者の不養生なんて洒落にならないから。」

労いの言葉をかけつつ帰ろうとすると、

??? 「石田先生。」

声がしたほうに向き直ると車椅子に座った少女が居た。

関西弁っぽい独特の訛りがかわええわ。

石田先生「あら、はやてちゃん。どうしたの？」

???「あのー、せんせいは結婚してたんですか？」

石田先生「えっ？ああこの子は友達の子なんだけど、両親が死んじゃったから私が親代わりかな。まあこの子の希望で結局一人暮らしなんだけど。よかったら友達になってあげて。うちの子あんまり友達いないから。」

はやて「はい！あの八神はやていいいます。変な名前やけどよろしくお願いします。」

神谷「…………。」

はやて「あのー、…………？石田先生？なんかこの子固まってるみたいなんやけど。」

石田先生「ほら、いい加減戻ってきなさい！はやてちゃんが心配してるでしょ！！」

神谷「はっ！こちらこそよろしく。神谷周平です。」

いかん！不意打ちの関西弁でトリップしてしまった。

石田先生「しっかりしなさいよ。女の子の前ではシャキツとしてなさい。そんなんじゃないぞ。」

神谷「はあー。独身貴族に言われてもねー。」

すると母さんから禍々しいオーラがみえた。

ゴゴゴゴゴッ！

という効果音を放ちながら。

とりあえず逃げた。この場に居ると再起不能しそうだった。

そして、鬼に追われる姿を見ていたはやては苦笑いしていた。

[illegible]

病院でス○ンド使いを振り切った後、少年は夕飯の食材を買いに
来ていた。

力を完全に制御できるようになるまで、夜の散策は一時中断しようと考えていたからだ。

スーパリーのタイムサービスで奥様たちとのバトルに勝利し、

ホクホク顔で歸路につくが、コンビニの前を通った時ふと

「ドリ〇スが食べたい。」と思い入店。

ついでに夕食用にカップスープでも買っていこうかと

手に取ろうとすると、誰かと手がぶつかった。

「あつすいま……せん？」

ぶつかった相手とシンクロした。

お互いに知った顔で、なおかつお互いに予想外だった。

そこに居たのは先日、鎌を突きつけてくれやがった金髪魔法少女がいた。

T o b e c o n t i n u e d

第三話 規律正しい混沌（後書き）

次回からちょっと物語が動き出すでしょう……たぶん。
ということでもたまたまお会いしましょう！ばいによらー！

第四話 居候（前書き）

更新遅くてすいませんorz

今月は出張が多いので更新が遅れそうです。なんと社会人の厳しいことか！！

だんだん会話が増えてきて、読みづらくなってきたので「」の前にキャラ名をつけ

てみました。その他にもこうしたほうが読みやすいなど感想ありましたら、ヨロシ

クオネガイシマス。では本編をどうぞ。

第四話
居候

彼女の名はフェイト。本名であるかは不明。僕がはじめて彼女と出会ったのは、昨日

の深夜。閑静な住宅地の裏路地だった。

「Bonsoir, — mademoiselle」

語り口調の上に、なんとなくフランス語で挨拶しながら状況を整理してみよう。現在

午後七時十二分十三秒。カップスープを買おうとしたら、ふつくしいおぜうさんに出会

った。ふたりは見つめあい、お互いに視線をはずすことができないなどと思っている

間にも二十三秒が過ぎてしまった。これはもう話し相手になるしかないだろう。

[illegible]

第四話
居候

「な？なんで？」

警戒心剥き出しで、それでいて呆氣に取られたような表情で聞く。

このなんではさ

まざまななんが含まれていることが容易に想像できるが、おそらくここで最も重要な

のは「なんでここにあなたがいるの？」だろうと考え

神谷「無論コンビニに居るのだから買い物なのは言うまでもないが、今まさにカップス

ープを獲得しようと行動していたところだ。フェイトは……ん？」

そこでふと気づいた。フェイトのかごの中がコンビニ弁当であることに。

神谷「なんだそれは!!?」

なぜかちよつとキレてる。

フェイト「え? いや…その…こ、コンビニ弁当。」

勢いに気圧されながら答える。

神谷「昨日からの食事を言ってみろ。」

ドスの効いた低い声で言う。

フェイト「……コンビニ弁当」

目を逸らしながら答える。

しばらくしてアルフという妙なのが合流した。フェイトの友達だそうだが耳としっぱ

があった。見事なコスプレだと思ったが、神谷周平はわんこよりも断然ぬこ様派だった

ので特に興味はなさそうに

神谷「きたければ勝手について来い。」

とだけ言って、さっさと歩き出した。

そして、ついたのはなかなか立派な門構えの日本邸宅。とても…
…大きいです…。

フェイト「ここは？」

神谷「僕の家だよ。ささっ遠慮せずにあがってくれ。」

少年の家にあがり、茶の間で待たされることになりおよそ30分。
目の前には色バラ

ンスの整った食事が並んでいた。ちなみに焼き魚、茶碗蒸し、卵焼
き、野菜スティック

だ。

神谷「お残しはゆるしまへんでっ。」

フェイト「あゝこれは？」

神谷「見ての通り食事だ。成長期のおんにゃのこがコンビニ弁当ではいかんよ。食事は

バランスが大切だ。アンバランスな食事は美容にもよろしくない。せつかくかわいいの

だから未来のためにもこうゆう事に気を使っておかないとな。美人が減るのは社会的な

損失だ!!」

フェイト「ま、またそういうことをすらすらと……（ぼそぼそ）」

フェイトが赤くなりながらなにかつぶやいている横で、アルフはすでに食事の殲滅に

かかっていた。

アルフ「うんまい!! ほらフェイトもはやく食べてみなよ。」

アルフに促されて食べ始めるフェイト。

フェイト「……美味しい。」

神谷「うまいなら何故にそんな釈然としない顔してんの？ カリスマ主夫兼和食の周さん

とよばれた僕をなめてもらっちゃ困るよ!」

フエイト「えっ！もしかしてスゴイ人！？」

アルフ「へへ。こんなちっこいの料理人だったのかい？」

神谷「いやUSO800だけど。」

二人「……………」

神谷「てんでんてんじゃないっての！だれが聞いても冗談だろ！！
気づこうぜ！そして

迅速かつ的確なツツコミぷり〜ず！」

アルフ「でも実際料理はうまいしさ。」

フエイト「うん。本当だとおもっちゃったよ。」

神谷「むっっ！そうか！うまいか！ならどんどんくっついていいぞ。デ
ザートも用意してる

から楽しみにしていたまえ！」

料理をほめられてうれしそうにしてテンション急上昇の少年を見て二人は笑った。

最近あまり笑うことがなくなっていた二人にとってこの暖かい日常が心地よく感じられた。

食事が終わると少年はずっと気になっていたことについて聞くことにした。

神谷「そいで？おふたりさんは何者なのかね？空飛んでたし、なんかつけゝ武器持つ

てたし。」

フェイト「……………」

神谷「答えたくない。…か？」

フェイト「ごめん。」

フェイトは心底申し分けなさそうにする。隠し事はしたくなかったのだろう。

神谷「別に謝ることじゃない。ただ気になってただけさ。かつけゝ武器はいままでいろ

いろ見たことあるけど、さすがに空とぶ人間を見たのは初めてでね。」

アルフ「でもほんとにいいのかい？気になってるんだろ？」

神谷「かまわんよ。そんなことより二人はこれからどうするつもりだ？」

フェイト「どうって？」

神谷「ジュエルシードっての？集めてんだろ？続けるのかってこと。」

フェイト「それは……もちろん続けるよ。今までどおり。」

アルフ「……フェイト……。」

アルフは心配そうにフェイトを見る。なにかあるのかどこか神妙な面持ちだ。

神谷「なるほど。なら好き勝手にさせるわけにははいかな。」

フェイト「え！！？」

アルフ「それはあたしたちの邪魔するってことかい？」

フェイトは驚き、アルフは睨みを利かせ威嚇してくる。

神谷「あぁん？何言ってるんだ？」

フェイト「いま好き勝手にはさせないって……。」

神谷「させるわけねーだろうが。何のために、ここに連れて来たとおもってる？」

フェイトとアルフは、ここに何かあるのかと周囲を警戒するが、

神谷「今までどおりにさせてたら、まうたコンビニ弁当だろうが。」

二人「「へ??」」

神谷「へ??じゃねーですよ。ーここーに連れて来たのはおまいさんらの食生活を正すためだ。」

二人「……あっ! ああ……。 (なんだ。そういうことか。)」

おもいきり勘違いして二人とも真っ赤になっていた。

神谷「ということで二人ともここに住みなさい。おいちゃんが養ったげよう。」

アルフ「ふうーん。アンタ意外と大胆だね。まあフェイトはかわいいからね。」

フェイト「あ、アルフ!!?」

神谷「ふむ。言われてみればその通りだね。まあ役得ってやつかな。」

フェイト「ちよっ!!! 何言って!!!? 駄目だよそんなの! それじゃあキミが巻き込まれるかもしれないし……。」

神谷「ノープロブレムですよ。これでも鍛えてますから! (というかドンドンウエルカ

ム」

神谷「さてとりあえず明日の朝食のしこみだな。ああ風呂はそこ
の廊下の突き当た

り。客間はいくらでもあるから好きなどこ使ってくれよ。」

言いたいことだけ言って出て行こうとする少年。

二人「「ちよつとまってよ（まちなよ）。キミは（あんたは）どう
してそう勝手

に。」」

神谷「いいじゃんか別に。たださっきから気になってたんだが…。」

二人「「なに？」」

神谷「僕には神谷周平っていう名前があるんだ。キミとかあんたじ
ゃちよいと寂しい

ね。これから一緒に暮らす家族になるんだからさ。MOTTO！M
OTTO！フランク

にいいこうか？」

言い残してさっさといなくなってしまった。残された二人はため
息をつきながらもど

こかうれしそうに、しかしどこか寂しそうに呟いた。

二人「家族……か。」

一方、少年はある悩みを抱えていた。一筋縄ではいかないととても切実な悩み。それ

は…

神谷「生活費大丈夫かな？」

先立つものがなかった。なのでとりあえず、

神谷（母さんに相談してみるか。）

電話で真実をばやかしながらも事情を説明し、生活費の増額交渉に当たった。が、

石田「自分でまいた種なんだから自分で責任取りなさい。私の息子は強い子だから何と

かなるでしょ。」

見事に切り捨てられた。ため息をつく少年。

神谷「はあ。仕事さがすか？」

少年の就活が始まる。この不景気な世の中で少年は仕事を見つけることができるのだ

ろうか。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第四話 居候（後書き）

同居！なんて甘美な響き！

というわけで（どういうわけだ！）流れるになんとかフェイトと同居と相成りま

した。なぜこうなったかというとはっきりいってなんとなくです。

べつにフェイトルート確定ではなく、神谷少年は皆のママっぽい立ち位置になって

いくかと……ああ予定ですがWW。

第五話 好敵手（前書き）

もう出張はいやだ~~~~~orz
という理由で更新遅れてます。

来月はもうちょっぴり早く更新できると思いますがるのでお慈悲を。

第五話 好敵手

朝、少年はいつものように鍛錬を始めていた。否、ひとつだけ違っていた。

それは二つの影。ひとつはフェイト、もうひとつはアルフだ。

そしていま、少年は模擬刀を握り締めフェイトと対峙していた。

神谷「いきます。フェイト。」

フェイト「いつでも……。」

鋭い視線が交差し、自分に最適な間合いを測る。そして、

二人「ハアあああああ！」

美しい剣舞が始まった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

第五話 ライバル 好敵手

実力が拮抗しているものの戦いにおいて、勝敗を決する要因といわれるもの。

それは『読み』。相手の動きをいかに早く、正確に読めるか。

そしてここに、その究極ともいえる体現があった。

単純にして単調な攻防。傍目にはそう見えるであろう。

少年は受身。相手の攻撃に合わせ、回避、そして反撃。

対するフェイトはヒットアンドアウェイが基本である。

そのため派手な打ち合いはまるで皆無だ。

しかし、見るものが見ればその異様さに気が付くだろう。

実際フェイトはかなり違和感を感じていた。

フェイト（?? なんだろう? まるで武器を振らされてる感じた。幽霊でも相手にしてるみたい…。）

あまり使い慣れていない武器とはいえ、ここまで違和感があると戦っている気がしなかった。

移動系の魔法を使っていないとはいえ、魔力で身体強化している状態。

その全力の踏み込みからの攻撃。しかし振り抜くとすでにそこに少年の姿はなく。

代わりに、死角から飛び込んで来るような軌道で攻撃が飛んでくる。

これこそ、神谷流を極める上で重要といわれる二つの要素の内の一つ。

相手の挙動から『未来』を予測しつつ、『今』を見ることで『刹那』の時間を支配する。

それが『読み』 神谷の『神眼』

全てを見通す少年の『神眼』はもはや芸術の域といえた。

フェイト（このまま続けても意味がない。なんとかして当てないと
！！）

しかしその瞬間、フェイトは信じられないものを見る。

神谷「瞬^{またたき}」

少年が呟く。刹那、フェイトの眼前にはすでに模擬刀が突きつけられていた。

神谷「勝負あり…かな。」

フェイトには見えていた。しかし、とっさのことで反応できなかった。

フェイト「速いね。いまのは？」

神谷「神谷流の歩法の一つさ。修練次第で移動距離を伸ばせるけど今の僕なら5mくらいなら一瞬で接敵できるよ。」

『瞬』は所謂瞬動術である。欠点としてはその速度から直線的な動きしかできないことか。

神谷「相手の攻撃が強力でも当たらなければ良い。そのための『読み』。気を込めた攻撃は一撃で人体を破壊するが、そのためには確実に当てなければ意味はない。そのための『歩法』。神谷の神髄は攻撃にあらず、全てを見通す瞳と相手を翻弄する足だ。」

フェイトは驚愕していた。魔法も使えない一般人（であるかは怪しい）が

なぜこれほどの強さを手に入れることができるのかと。

フェイト「完敗だね。全然反応できなかった。」

しかしその言葉に少年は納得していないようだった。そして、

神谷「フェイト。頼みがあるんだけど…。」

フェイト「どうしたの？」

神谷「一度だけでいい。本気で戦ってくれないか？僕では相手にならないだろうけど…。それでも自分の実力でどこまでできるか試してみたいんだ。」

少年は気になっていた。フェイトの内に秘めている力に。

神谷「もちろん武器も使い慣れてるものでかまわない。」

フェイトは少し悩むように首をひねる。

フェイト「一度巻き込まれたら無関係じゃいられなくなるよ。」

それは警告。不用意に飛び込んではいけない世界。そこにあるのは命がけの戦い。

しかし、少年の意志は揺るがない。

フェイト「わかった。」

アルフ「フェイト、いいのかい？」

本気を出せない理由。それはもちろん魔法をむやみに使うわけにはいかないからだ。

魔法に関われば、これから巻き起こるであろう管理局との対立に巻き込んでしまう。

フェイトはそれを避けたいと考えていた。だが、

フェイト（眼が違う。理由は分からないけど、覚悟を決めた眼だ。）

少年は普通ではなかった。その雰囲気からは何か決意を感じられる。

何か闇を抱えているような黒い決意。

フェイト「いくよ、バルディッシュ。」

バルディッシュ《yes, sir. set up.》

光がフェイトを包み込みバリアジャケットに換装。バルディッシュはサイスフォームになっている。

神谷「フェイト、ひとつ聞きたいんだけど。いいかな？」

フェイト「答えられる範囲でなら…。」

神谷「なに簡単なことさ。質問はひとつそれは『魔法』か？」

フェイト「え!？」

アルフ「何でそれを!？」

神谷「知っているのかって？答えは【すでに巻き込まれている】ってことさ。」

不敵に笑う少年に驚愕する。

フェイト「巻き込まれてるって!？どういうこと？」

神谷「そのうち話すよ。だけどまだそのときじゃない。役者が揃ってないからね。」

フェイト「役者？」

神谷「そう。僕の敵がね。」

フェイトは沈黙する。飲まれたのだ。少年の圧倒的な狂気に…。

神谷「早速はじめようか？　つと言いたい所だけど、残念ながら学校に行く時間だ。続きは明日。」

フェイト「う、うん。わかったよ。いつてらっしゃい。」

神谷「ああ。いってきます。」

フェイトの中の疑問は膨らむばかりだった。彼はいつたい何者なのかと…。

[illegible]

喫茶【翠屋】

「なんでおまえがここに居る？」

少年はいま、射殺さんばかりの視線と凄まじい殺気にさらされていた。

どうしてこうなったかは、ほんの30分ほど遡る。

放課後。少年は悩んでいた。

神谷「足りない。絶望的に足りない。」

なのは「どうしたの？」

アリサ 「何が足りないのよ？」

すずか「私たちでよかったら相談に乗るけど…。」

神谷「金」

アリサ「うわ！俗物！」

神谷「誰が俗物だ！生活費が足りんだ！食い扶持が増えたからな。」

すずか「ペットでも飼ってるの？」

神谷「まあそんなとこかな。」

なのは「なに飼ってるの？犬？猫？」

神谷「犬だな。二匹とも。僕は猫派なんだけどね。」

アリサ「じゃあ何で犬なのよ。」

神谷「なりゆき。」

なのは「ねえ見に行ってもいい？」

神谷「気ままな放し飼いだからいつも居るとは限らんよ。」

アリサ「放し飼って…。あんた迷惑この上ないわね。」

神谷「モーマンタイ。人に迷惑かけるような奴じゃないから。だが食うもんはしっかり食うからな。」

すずか「それでどうするの？」

神谷「どうするもなにも小遣い稼ぎに仕事するしかないかな？」

なのは「じゃあ家でお手伝いしてみる？わたしもたまに手伝うんだけど。」

神谷「家？なんかやってるの？」

なのは「喫茶店なの。翠屋っていうの。」

神谷「へえ。でもいいのかな子供のバイトで。」

なのは「大丈夫だよ。そんなに難しいことはさせられないから。」

アリサ「面白そうね。さっそく行きましょ。」

すずか「うん、行こう。」

で、翠屋到着。なのはに家族を紹介された。

父が士郎さん、母が桃子さんだそうだ。

士郎さんは、かなり無駄なく鍛えられていて、動作のひとつひとつにまったく隙がない。

おそらくかなりできる人だろう。

桃子さんは、とにかくオーラが半端無い。逆らえないオーラ。

王女の風格とでもいうのか…。触らぬ神に祟りなし。

一通り挨拶も終え、仕事について切り出そうとしたとき…

奥から奴がやってきた。

??? 「なのは、おかえり。友達もいっ…しよ…か？」

少年も突然のことで相手をガン見してしまった。

なぜなら、こんな所で遭遇するとは夢にも思っておらず、しかも

お互いにいい印象は持っていなかった。

そして、先ほどの台詞に戻る。

??? 「なんでおまえがここにいる？」

神谷「それはこちらの台詞だよ。御神の…。」

御神という単語に士郎さんが反応していた。どうやら士郎さんもこっちの人間のようなのだ。

??? 「質問に答えろ。」

神谷「喫茶店に来るのに理由がいるのか？営業妨害だぞ。さっさと帰って糞して寝ろ。」

??? 「ここが俺の家だからもう帰ってきている。」

神谷「……………すまん。」

???「何で謝るんだ？」

神谷「まさか難民だとは思わなかった。よかったら安いアパートでも紹介してやるが…。」

???「違う!!」

神谷「めいっぱい否定したな。だが世間体など気にしてる場合か! ? 屋根がないのは辛いだろう?」

???「貴様ア!どこまでも俺を馬鹿にする気か! ?」

神谷「馬鹿になどしていない。心配してやってるだけだ。」

???「もういい!いつかの決着、ここでつけてやる!」

神谷「ここではやめろよ。営業妨害だと何度言わせる?」

???「少し離れてるが道場があるからついて来い。」

神谷「やるとは言っていないんだが…。」

???「問答無用!!」

神谷「士郎さん。あの???を止めてください。あなたなら簡単でしょう。」

士郎「うゝんでもキミの实力が見てみたいかな。」

神谷（なんてこった。就活してて殺し合いに発展とかありえんだろ。）

心の中で悪態をつきながら、????の後に続く。というかいつまで????なのか。

その答えは次回あきらかに！！

t o b e c o n t i n u e d

第五話 好敵手（後書き）

次回は？？？と殺し合いです
W
W

第六話 剣士（前書き）

さきに謝っておきます。ごめんなさい O r Z
ネタに走りました W W W

第六話 剣士

はい！というわけでやってきました。道場です。

なに？投げやり？まああんまり乗り気じゃないけど、殺るからには殺りますとも。

士郎「じゃあはじめようか？ルールは相手に一撃入れれば終了。」

神谷「質問です、士郎さん。一撃というのは剣以外でのものも含まれますか？」

士郎「もちろん。有効打ならだけどね。」

神谷「そうですか。」

士郎（おもしろくなりそうだね。）

当事者でない四郎さんが一番ノリノリだ。

神谷「ところでギブアップは無し何ですか？」

士郎「そうしたら周平君は開始と同時にギブアップして逃げるだろう？」

神谷「（ばれてやがる！！）でも本気でやったら死人が出ますよ。それに見てください！あの???の顔。目は釣りあがって顔はぼお〜としてるでしょ。あれはKI☆TI☆GA☆Iの顔ですよ！！」

「????」「だれがキ○ガイだ！俺にも高町「黙れ！！」…名乗らせろ！」

神谷「物語の本筋に関わってくる訳でもない路傍の石の貴様など【中ボス】で十分だ！！」

中ボス「変な名前をつけるな！！それに前話のタイトルを見ればわかるが俺がライバルなんだろう！？」

神谷「何処にも貴様がライバルだ。などと書かれていないわ！ライバルならこんな酷い扱い受けるわきゃねえ！だろうがぁー【そこはかとなく子安ボイス】！！大体貴様の（主人公だった）物語は終わったんだからでしゃばってんじゃねえぞ中ボス（笑）が！！」

中ボス「中ボスゆーな！！いいかげん名前くらい言わせろ！！」

神谷「なめんな、Fuck'in. ちょっとイケメンでいい声してるからって調子に乗るな！悔しかったら『バンド名はリトルロリロリバスターズだ！！』って言うてみる。そしたら【変態辻斬り】にクラスチェンジすることを許可しよう。」

中ボス「誰が言うか！というか【変態辻斬り】なんてなお悪いわ！！」

士郎「（うーん。収集がつかなくなってきたな。）」

しばらく口論をつついていると、士郎さんは苦笑いしていた。そろそろきりあげるか。

神谷「ならば勝負！貴様など数々の漫画を読んできた僕の技でヌツ

神谷（やはり来たか！！御神の神速！！）

それは常人ではまったく反応できない一撃だった。しかし、

神谷「来るとわかっていれば、見えないことは無い！」

少年は距離を詰める。神速による高速の一撃を警戒していることもあるが、

体格が小さくなおかつ無手での攻撃も許可されている。

ならば、相手の間合いの内側に入ったほうが有利と考えたためだ。

神谷（一撃いければ勝ちってことなら数撃ちや当たる戦法！手数で勝負！！）

神谷「白虎の参・虎王猛襲撃」
コオウモウシユウゲキ

相手の懐に飛び込みほぼ零距离での乱打。単純すぎて技というものもおこがましいが、

単純であるが故に速力を殺さず、迷いのない攻撃が放てる。

しかし、そうそう上手くいくものでもなかった。

中ボス「調子に乗るな！！」

防御に徹していた中ボスだが体格差を利用して少年の体を突き飛ばす。

神谷「チッ！大人げない奴め！鬼畜！変態！ゴミ虫！否、ゴミ！」

中ボス「そこまで言うか！？」

神谷「隙あり〜！」

わざわざ反論してくるおもしろい奴である。

中ボス「チッ！あいかわらず卑怯な奴だ！」

神谷「卑怯じゃない。というかいちいち反応するおまえが馬鹿なんだ。」

中ボス「……………」

神谷（とうとうキレたか？それとも弄りすぎて逆に冷静になったか？どちらにしてもそろそろこっちは体力的にもきついな。勝っても負けても次の一撃で最後にしよ。だるいし。）

だいぶやる気のない理由だが、体格差のある相手との戦闘は体力の消耗が

激しいようでこれ以上長引かせるのは危険と判断した。

少年の構えが変わる。

神谷「示現流・蜻蛉。」

中ボスも正眼に構え迎え撃つ。

神谷「雲耀【疾○】（もどき）」

次の瞬間、少年の姿が視界から掻き消える。

中ボス（なっ！消えた！！）

反射的に振り向こうとするが、

ズドンッ！！

という音とともに床に叩きつけられ中ボスは昏倒した。

士郎「勝負あり！」

神谷「ヴィクトリ〜〜〜！！」

士郎「強いね神谷君。さっきのはなんだい？示現流だから鹿児島流派が源流なのかな？」

神谷「良くぞ聞いてくれました。これは高速で相手の死角に回り込み一撃必殺！というイカした技です。試合前に言いましたが、漫画を読みまくった成果ですね。なんかいけそうな気がする！っと思っただ技を自分なりのアレンジで再現してみました。」

元ネタがわからない人は【しな○いっ】を呼んでみよう。

竹刀なのに無駄にかっこいいぞ！作者は【しなこ○っ】を応援しています。

ちなみにドラマCDで鳴神○春役は水樹○々さんだお。

士郎「自分なりのアレンジ？」

神谷「本当は目では追えないほどの高速移動するんですけど、それは難しいので神谷流の【絶】という歩法を代用しました。これは追ってくる相手の視線を読み、緩急をつけた動きで死角に飛び込むというもので純粋な高速移動ではありません。よってもどきなのです。」

士郎（もどきでも十分すごいと思うけど…）

ちなみにあまりにも白熱した勝負に啞然として、もはや空気と化していた

ギャラリーたちは超人的な戦いを目にしたせいにかいまだに固まっていた。

そして、我に返ったなのは、アリサ、すずかの三人はみな一様にこう思っていた。

三人（（きつと夢でも見てたんだ。忘れよう。））

人間は理解不能な現象を目にすると現実逃避する生き物である。

そして、今日の前で起こった現象は少女たちの常識を超えていた。

神谷「さて十分遊んだので僕は帰ります。中ボスが起きると面倒ですし、何より疲れました。」

士郎「なにか用があったんじゃないのかい？」

神谷「まあ…あるにはあったんですけどこれが居たんじゃ頼むに頼めませんから。」

といつても言わぬ屍となった中ボスを指差す。

士郎「うーん。そうかい？でも困ったことがあればいつでも相談にくるといい。」

神谷「ありがとうございます。暇があればまた顔出しに来ますよ。」

そういつて少年は帰っていく。

神谷（さてどうするかな？……面倒だが久しぶりに【裏】の仕事でもするか。意外と割りのいいボディガードかな。）

今後のことを考えながらいつも【裏】の仕事を斡旋している。情報屋に連絡をとる。

神谷「やあアビス。久しぶりだね。仕事はあるかい？」

アビス「ごきげんよう。我が友よ。どんな仕事をご所望かね？」

神谷「比較的割のいいボディガードの依頼は無いかな？」

アビス「おおちょうどいいのが1件。社長令嬢の護衛だ。」

神谷「受けよう。詳細は？」

アビス「追って連絡しよう。しかし、少年と話すのも久しぶりだね。てっきり足を洗ったと思っていたが……」

神谷「なに…急に金が必要になっただけだ。」

アビス「E n e f f e t なるほどならばキミと私が出会ったときと同じ状況かな？」

神谷「少し違うな。今回は必要に迫られてというわけじゃない。」

アビス「いいのかい？今まで私に連絡してこなかったということは君の人生は順調なのだろう？」

神谷「かまわんさ。僕の手は汚れすぎている。そのことを知ってもなお、今の保護者は面倒見てくれるが、僕にそんな価値はない。それに【来るものは拒まないが去るものは決して許さない】のだろう？」

少年とアビスが出会ったのは、両親が死んですぐ…

親戚にたらい回しにされていたときだった。

尊敬していた両親の死。

そして、親戚にも見捨てられた自分。

人生のどん底。失意の少年は彼と出会う。

深夜の路地裏。目的も無くふらふらと歩いていると、

アビス「ごきげんよう！ かわいそうなお坊ちゃん。楽園パレードへようこそ。」

振り向くと少年の背後には仮面の男が立っていた。

そのときの少年は心が壊れてしまっていた。

そして、孤独な少年の暮らしは困窮していた。

だから言われるがままあらゆる依頼をこなした。

殺人・窃盗・誘拐・密売

悪魔に魂を売り渡すかのように金になることなら何でもやった。

問うべきは手段ではない。少年にとって目的こそが全て。

切実な現実。彼には金が必要だった。

保護者の無い少年にとって信じられるものは何もなかった。

そして、少年は強くなっていった。全てを飲み込むように…。

だが、1年後。少年を引き取るという変わった人物が現れる。

両親の友人で医師だそうだ。同情などまっぴらごめんだった。

どうせバレるだろうしと、少年は今まで自分のしてきたことを話した。

どうせ裏切られるならばと、

しかし、その反応は予想外のものだった。

石田「そっか：辛かったんだね。でももう大丈夫だから。今日から私がお母さんだからね。」

気づけば少年は泣いていた。

そして、目の前の人物。人生第二の母を心から尊敬した。

少年は考える。この人にはできる限り迷惑をかけないように生きようと…。

これを気に少年は【裏】の世界から姿を消した。

神谷「でも僕はどうやら【裏】こちら側の人間のようにだ。平和な空気が体に馴染まない。全身が混沌を！闘争を求めている。」

アビス「暴れるのはかまわないが、今回の依頼は護衛だ。しっかり頼むよ。」

神谷「ノ～プロブレム。やることはやるさ。じゃあまた…。」

電話を切り、家路に着く。

その足取りは軽い。まるで年相応の少年のようだ。

家に帰れば楽しみにしていたフェイトとのガチバトル。

神谷（僕は何処まで戦えるかな？ いざとなればジュエルシードの力を解放してみるか？ はたして魔法と何処まで対抗できるか？ いずれにしても楽しみだ。）

その顔に浮かぶは狂気。 深遠な闇。

少年は何処に向かって歩むのか？

t o b e c o n t i n u e d

第六話 剣士（後書き）

次回フェイトとガチバトル。

少年の力は魔法に対抗できるのか？

少年の敵とは何か？

第七話 解放（前書き）

私は生涯ESCキーを愛することはないだろう。
なぜなら完成間近の小説を削除してしまったのだから。

ええそうですとも。ネタが浮かばないながらも必死に考えました。
それなりのに♪それなのゝに♪
完成間直で奴にやられました。

その瞬間、聖戦のイ○リアのとあるワンフレーズが頭をよぎりましたよ。

ふしあわ♪せなときゝには♪もうきづゝいてゝもておゝくれ♪

まさに手遅れでしたよWW

嗚呼JI○ANGさん、我に力を！！

第七話 開放

開始と同時にフェイトが動く。

バルディッシュ『sonic move.』

高速移動の魔法で少年の背後に回る。

フェイト「ハァー!!」

勢いのままに横なぎを放つが、まるで予期していたかのように避けられる。

神谷（速い!! けど見えないほどじゃない。中ボスと戦ったのがい目慣らしになったな。）

フェイトはそのまま追撃する。反撃の隙を与えないほどの猛攻。

フェイト（あのスピードで避けられるとは思わなかったけど…。）

少年が徐々に退いていく。

神谷（もうチョッち距離が欲しいが…。仕方ねえ、多少強引に仕掛けるか。）

すぐさま牽制の一撃と同時に距離をとる。

フェイト（距離をとった？でもやらせない。）

迎撃の準備をする暇さえ与えまいと、瞬時に距離を詰めようとする。

しかし、それは見えない何かに阻まれた。

少年の数メートル手前にそれはあった。

それは、かなり細身の鉄線。

少年の最も使い慣れた武器といえる弦。中距離からの直接攻撃・トラップの

設置など使い方もさまざまであり、邪魔にならないよう手袋に仕込むことで

無手による近接戦闘との切り替えもスムーズに行える。

これひとつで戦略の幅が広がる。頭を使って戦う少年には最適の武器だ。

何重にも張り巡らされ、行く手を阻んでいる。

フェイト（いつの間に!?!）

少女は驚愕する。そんな隙はあっただろうか？離れていたのはほんの一瞬。

その間にそこに壁を作ったのだ。

フェイト（あのまま進んでたら終わってたかな。）

とっさに急停止しものの、左腕を少し切っていた。

そのまま進んでいたら、ずたずたに切り裂かれていただろう。

フェイト「怖いね。そんなこともできるんだ？」

神谷「神谷流には弦術もあるからね。今は『神業・弦の壺 風』カミワザ。平たく言えば設置型トラップ。高速戦が得意な相手の動きを制限するのに最適だろ？（意外といけるな。これなら力の解放もいらないか？）」

しかし、その目論見は見事に外れる。

フェイト「でもあるって分かればそれなりの戦い方があるよ。」

バルディッシュ『photon lancer.』

神谷「マジか！？（何でもありだな魔法！！人のことは言えんけど。）」

フェイトの周りに5つの金色の光弾が発生する。

フェイト「ファイヤ！」

神谷「チィ！『神業・弦の式 竜巻』。」

自分を中心に鉄線を渦巻状に展開し、遠心力を使って勢いを増していく。

それはまさに竜巻。襲い掛かる光弾を叩き落していく。

神谷（弾速も速いし、直撃すれば脅威だけど…。見た目ほど恐ろしいほどじゃないか？）

撃墜した光弾による爆煙が晴れるとそこにフェイトの姿はない。

神谷（当然の判断か…。さて次はどう出る？射撃で牽制か？近接で一気に決めに来るか？それともまだ見たことのない魔法か？いずれにしても相手がオールラウンダーだと考えることが多くて困る。）

いつものように相手の動きを考察する。

不意に周囲に違和感を感じる。次の瞬間、体が拘束された。

神谷「なっ！！（捕まった？）」

フェイト「バインド。魔導士はこうゆう事もできるよ。」

声が聞こえると同時にフェイトが突っ込んでくる。

神谷（親切なこと…。わざわざ説明までしてくれるとはね。フェイト先生の魔法教室ってか。まあ正攻法では勝てないみたいだし、試してみるか。）

神谷「気功抑制解除。さあ第二ラウンドと逝こうか？」

抑制していたジュエルシードの力を一気に解き放つ。

流れ出す力に耐え切れずバインドが吹き飛ぶ。

フェイト「これは!?(魔力?)」

フェイトは困惑した。それは本来、少年が発せられるはずのないものだった。

神谷「ハァーハッハッハッハ!! 順調! 快調! 絶好調!」

力の解放で感情が高ぶったのか、少年が高笑いし始める。

神谷「やはりこの台詞は言っておかねばなるまい。最高にハイッてヤッだ!!」

少年とは対照的にフェイトただ驚愕していた。

ただでさえありえない少年から発せられる魔力。

そしてその量も、自分と同等あるいはそれ以上だった。

神谷「そら! 逝くぞ!」

声をかけられフェイトも我に返る。

神谷「朱雀の壺・鳳翼天昇^{ホウヨクテンショウ}。」

跳び膝ゝ跳び蹴りゝそのまま体を捻り後ろ回し蹴りゝ踵落としの空中連撃。

フェイト「!! バルディッシュ!!」

バルディッシュ『defender plus.』

一瞬反応が遅れたため、障壁を展開して防御にまわるフェイト。
しかし

ガンッ！！ガンッ！バリイーン！！

三撃目であっけなく障壁を破られる。とどめの一撃が迫る。

フェイト「くっ！！」

咄嗟に体を翻し、無理やり回避運動をとる。

次の瞬間、

ズドオオオオン！！

信じられないような轟音と共に床が打ち抜かれた。

アルフ「スッ、ストップ！！何やってんだい！！こんなの当たった
らフェイトが死んじまうよ。」

その蹴りの威力は常軌を逸していた。

木造の床どころか、コンクリの基礎部分を砕き、

仕舞いにはその下の地盤を沈下させていた。

神谷「またやっちゃった〜〜！！」

とりあえず叫んでみた。何の解決にもならないがとりあえず叫んだ。

試合が、死合いに変わってしまったので中断と相成りました。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

とりあえず今僕はor z座しています。

それはもう清々しいほど完璧で美しいフォームの。

もはやor z座の向こう側といっても過言ではないほどです。

何を謝罪しているかですと？

無論、テンション揚げりすぎてうっかり殺傷レベルの一撃を放ってしまったことに対してでありますお（もはや支離滅裂）。

反省もしているし、後悔もしている。

フェイトにヤバイ攻撃をしたこともそうだがもうひとつ。

そう、床を破壊してしまったのです。

前回の道場爆裂ファイヤー事件（第三話参照、センスなしの作者が勝手に命名）

そして、フェイトとアルフという食い扶持の増加。

これだけでも家計は火の車だというのに、

また修理代が!!

もうやめてくれ!! 家の家計のライフはもうゼロよ!!

あっ、本題からずれました。

そうorz座で謝ってる最中でした。

フェイト「怒ってないから。ね? 頭上げてよ。怪我もしてないし、
なんともないから。」

何故だろうか? 土下座してる側よりされてる側のほうが困ってる
んだが…。

アルフ「ほら、フェイトもいいって言うてるんだからもうやめなよ。
」

神谷「駄菓子菓子!!」

アルフ「いいから! 駄菓子も菓子もないよ。この話は終わり。」

フェイト「そうそう。ほら運動しておなか減ったから夕食にしよ。」

あまりの優しさに涙が出そうだった。

神谷「いよおゝかろう!! ぬあゝらばつくってみせよう。あっ! と
いうまにいい!! (ワリカシ若本ボイス)」

そんでもって

あっ！

という間に夕食です。

ええ作って見せましたともあっ！というまに

さすがやればできる子！！

自画自賛はこの辺にしておいて、やはり家族での団欒はいいもの

だ。

一人で寂しくつつくより楽しいし作り甲斐もある。

しかし、魔力に関しては何も聞かなくてくれたのはありがたい。

というより聞かれても分からんからジュエルシードの性とかい
えんし、

さてさて、明日の護衛任務アルバイトに備えてしっかり寝ておこうかのおく。

さあ！お仕事です！！

t o b e c o n t i n u e d

第七話 解放（後書き）

まとめ方が雑というか無理矢理ですね。ごめんなさい or z
次は本編から少し外れて閑話です。
噂のアルバイトにいそしみます。

おまけシナリオ 第七 五話 護衛任務 前編（前書き）

あゝしんど。

主に実家に帰ってきた兄貴の面倒見るのが…。

いや確かに兄貴の就職決まってるめでたいことはめでたいんですが…。
彼女とのろけ話とか聞きたくねーし！！

彼女いねーのか？とか嫌味ですか？

高卒で働いてる俺にはそんな遊ぶ暇なかったっすよ。

ていうか誰のせいで高卒で働いてると思ってるのか？

誰かさんが働かずにふらふらしてるおかげでしわ寄せが俺に…。

しかも俺の就職が決まって家計にも余裕が！っと思った矢先に専学に逝きたいなど

抜かす始末！

すんませんorz愚痴が…。

今回はおまけなので一話完結にしようと思ったんですが予想以上に長くなりそうなので、前後編になりました。

おまけシナリオ

第七・五話

護衛任務 前編

今俺は護衛任務についている。護衛対象を目視で確認。とりあえずDBを被る。

神谷（いかした声）「こちらスネ○ク。聞こえるか大佐？」

神谷（渋い声）「良好だス〇ーク。」

神谷（いかした声）「待たせたな。潜入ポイントに到着。」

神谷（渋い声）「○ネーク。本作戦は潜入任務だ。スニーキングミッション。決して護衛対象に見つかってはならない。」

……というわけで僕の名演技で状況は理解していただけただろうか？

そう！今はアルバイトの真っ最中。

護衛対象は実に厄介だ。なにもないことを切に願う。

[illegible]

第7.5話

アルバイト
護衛任務前編

さて少し時間を遡り、依頼内容を確認しよう。

アビスに連絡をとった後、メールが送られてきた。

簡単に依頼内容が書かれていた。

依頼内容

指定した時間の護衛対象の安全確保

なお、護衛対象はこのことを知らなため見つかつてはならない。

発見された場合は、報酬の減額又は依頼の中止の可能性も有。

概要

護衛対象は、社長令嬢であることもありつい最近も誘拐（ほとんどが未遂で終わる）

の被害に遭ったそうだ。これを気に本人に気づかれないように護衛をつけることが

決定した。

護衛対象は友人と普通に休日を過ごしているため、不審者等を鎮圧する場合は

気づかれないように細心の注意を払うよう留意。

護衛対象の情報は別途メールにまとめて送信する。

といった内容だった。

読み終わったところに、もう一件メールが来た。

おそらくこれが、護衛対象の情報だろう。

これを読んだ瞬間、この依頼を受けたことを後悔した。

護衛対象について

護衛対象者…アリサ・バニングス

私立聖祥大付属小学校3年生

ここまで呼んだ後しばらく泣いた。

世間の狭さに泣いた。

依頼内容に関係なく見つかったてはならない理由が増えた。

なら友人ってのは当然あの二人か？

最悪だ。依頼内容は事前にしっかり確認しましょう！！

— — — — —
— — — — —
— — — — —

回想が終わったところで装備の確認をしよう。

まずは、監視必需品。双眼鏡！！

見つかったも「バードウォッチングしていたんです。」の一言で

誤魔化すことができる優れものだ。

これも監視には必須。携帯糧食。

はつきりいってカロリー○イトだったりする。

うますぎる！！

そしてお待ちかねの武器は…。

今でも世界中で愛されている非殺傷兵器。

その名も『ハンドガン』（アンサ○クロペディアの同項参照）

安心、安全に制圧できる究極兵器だ。

ここまでは僕も納得の装備だ。

問題は僕の今の服装だ。

何故こんなカワゆいワンピースを着ねばならないのか？

バレないように変装を…っと思って何かないと探していたら

母さんに女装させられ、そのまま院内を散歩という羞恥プレイ。

になるかと思ったらなんと！！

誰も気づかないという緊急事態。

医師も看護師も誰一人！！微塵も気づかないのです。

コイツら目がおかしいのか？と思って試しに翠屋に逝ってみました。

士郎さんは気づいてくれませんでした。

否、気づかれたらまずいのか？いろいろと（主に世間体とか）

嗚呼、鬱だ。シノウ。

ちなみに桃子さんは一瞬で気づきました。

曰く

桃子「まあ！！とってもかわいい男の娘ネ！」

だそうだ。泣いてもいいよね？

現在の装備はこんなものだろうか。

護衛に戻るとしましょう。

ちょうど護衛対象が友人一行と合流したところだ。

遠目に見て気づいたけど、隠れて（いるつもり？）護衛している

SPたちが丸見えだったりする。

護衛対象に怪しまれなければいいとでも思ってるのか？

周囲の目の白いこと…。

黒服のグラサンのガチムチがこそこそと少女を着けまわしてる様は

一般人から見ればもはや幼女性愛者以外の何者でもない。
ロリペド野郎

逆に犯罪者が見れば「あの激萌少女はVIPですよ。」と宣伝して
歩いてるようなものだ。

無能で厚顔無恥な変態は早急に解雇してもらわねば…。

とりあえず僕の依頼人^{大佐}に報告しておこう。

あの護衛は変態でお嬢さんを【狙って】おります。と

HA☆HA☆HA！！完璧だな。これなら確実に死ねるだろう。

などど阿呆なことをしてるうちに対象が移動を開始。

女装のおかげで隠れる必要もない。GREAT^{泣けるぜ。}

どうやらショッピングに勤しむようだ。

アクセサリーショップ・ファンシーショップなどいかにも女子！
！って感じの

チョイスでまわっていく。

だが次が問題だ。いや正確にはその買い物の【内容】がだが…。

着いた先はゲームショップ。みな思い思いの品を選んだようだが…。

はっきり言って突っ込みどころ満載だな。

一気に見ていきましょう。

なのは…アーマードコア フォーアンサー

アリサ…デッドライジング

すずか…アサシンクリード？

見事に女の子らしさの欠片もないな。

というかアリサとすずかは何故買えたし。

なのははまあ動体視力いいみたいだから意外とできるのかもしれない

んな。

鈍くさいけど…。

アリサとすずかのはまんまこの前遊んだときにいたずらで僕が持つて

いったものとまったく同じチョイス。

買うほど気に入ったのか？

アリサはあのシュールな感じに爆笑してたし（グロイところではびびってたが）、

すずかは自由に跳びまわれるあの感じが気に入ったようだった。

正直、「なぜころたし？」って言いたくなっただけど…。

それよりそんなもの持ちながら和気藹々と会話するなよ！！

いろいろ不安になる（主に将来的なことが）。

おっと外に出るようすな。

飯時の所為か人が多いこと…。

見渡す限り人、ひと、ヒト、人？使徒？

さてさて、ここで問題発生。

覚悟しろ！死ぬほど後悔させてやる！！

t o b e c o n t i n u e d

おまけシナリオ 第七. 五話 護衛任務 前編（後書き）

結局次回遭遇します。

まあ女装の時点でフラグたってますしWW

嗚呼、そこに《物語》はあるのだろうか？

おまけシナリオ 第七. 五話 護衛任務 後編

もうどうでもいいや。

とりあえずコイツら全員死刑だな。

さあ、O☆SHI☆O☆KIの時間だ！

第七. 五話 おまけシナリオ 護衛任務 後編

すずか「やめてください！！」

こらこら！！おさわりは禁止ですよ変態さん！！

バカC「ほらあ、一緒にあそぼーぜ。」

どうでもいいが何でバカってのはいつも3人組なんだろう？

バカの黄金比なのか？

っとそんなこと言ってる場合じゃないな。

まずは牽制だな。さあ高いところへ。

神谷「までえい!!」

とりあえずボスっぽい奴に石を投擲する。

バカA「な、なんだ!？」

神谷「(・∀・) F U H A H A H A H A!! 悪しき星が天に満ちるとき大いなる流れ星が現れる。その真実の光の前に悪しき星は光を失いやがて落ちる。人それを裁きという。」

バカB「だ、誰だ!!?」

神谷「貴様らに名乗る名前はない!!」

一度言ってみたかったこの台詞。ふう、とりあえず降りるか。

神谷「とう!!」

アクションスターも真つ青な動きをしながら跳躍する。

神谷「サ○ダアーッポルトスクリューッ!!」

3匹の中で一番三下っぽい奴に狙いを定め思い切り跳び蹴りをかます。

神谷「とあアアアッ」

悶絶しているバカCの前まで一気に踏み込み、

ボデイボデイボデイボデイボデイボデイボデイボデイボデイ
イボデイボデイボデイボデイボデイボデイボデイボデイボデ
イボデイボデイボデイボデイボデイ

そのまま倒れそうになるが、そうはさせない。

神谷「ゴッ○ハァ〜ンドウ！○マアツシュ！！」

さあ〜皆さんご一緒に！！

神谷「S^成AY！B^敗ye！！」

バカC「ケ、けぼ〜！！」

意味不明な叫びをあげながらバカC轟沈。

神谷「バカは最後までバカだったか…。（言語的な意味で）」

言語障害とは…哀れ。

神谷「大丈夫ですか？かわいらしいお嬢さん方。」

そのお嬢さん方「「は、はい！大丈夫です。」」

大変結構。

バカA「な、なんだこのようしゝよは…！！？」

ようしゝよ…だと！！？

神谷「バカは死なねば治らんらしいな。よろこべ！僕が調教してあげよう。」

バカB「ウホ！！ボクっ娘ようしゝよ！！」

神谷「クロス！！」

バカBに指先銃口を突きつける。

神谷「頭ズドーン！！」

バカB「あべしっ！！」

凄まじい反動（を受けたような動き）ともにバカBの眉間が打ち抜かれる。

説明しよう！！ハンドガン（笑）は発射音を変更することで

その威力を自由自在に変えられるのだ！！

まあこの少女…もとい、少年は遠当てによってリアルハンドガンを実現しているのだ。

そんなこととして死なないのか？とか余計なことは気にしてはいけない。

あえて言えばギャグ補正で命に別状はない。

神谷「さあ残るは貴様だけ…。僕をようしゝよ呼ばわりした罪は重いぞ。」

それじゃあ早速cooking:。否、fucking
ti
me!!

あまりに残虐な仕打ちのため描写できません。

ヤンマー二な弾除けBGMでも聞きながらお待ちください。

神谷「終わったか。何もかも…。」

今頃あの変態どもはちよつと『アレ』な

ポリスに絞られているだろう。(性的な意味で)

なのは「あ、あの…。」

おおう!すっかり忘れてたがいたんだったな。

一応、ばれないようにしておこう。

神谷「どうなさいましたか？」

なのは「た、助けてくれてありがとうございます。わたし高町なのはって言います。」

はい。存じておりますとも。

神谷「たいしたことではありませんよ。悪を滅ぼすのは正義の役目。今頃彼らは生まれてきたことを後悔しているはずです。（もちろん性的な意味で）」

アリサ「ずいぶん過激ね…。ちっこいのに。」

神谷「ああん？」

すずか「ア、アリサちゃん！失礼だよ！あの、私は月村すずかって言います。あなたのお名前は？」

月村さんや、失礼だとか言いつつおまいさんも子ども扱いですか？

というかお前ら気づいてないのか？

同級生だろ？

最近なったばかりとはいえとはいえ友達だろ？

おいちゃん悲しい。

ぐれるぞ、ぐれてやる、ぐれました。

アリサ「ちょっと、さすがが質問してんだから答えなさいよ。」

カチーン。委員長の奴こんなむかつく奴だったか？

何気に優しい奴だと思ってたんだが？

神谷「私はイン○ックスて言うんだよ。おなかいっぱい食べさせてくれたらうれしいな。」

アリサ「思いつきり偽名じゃない！！しかも僕から私になってるし、さりげなく自分の欲求満たそうとしてるし。」

神谷「あんだよ。文句あんなのかコラア！？ああん？」

アリサ「ヒュッ！！」

おやおや？ちょっとスゴんだらびびって涙目になってやがりますよ。

すずか「ほらアリサちゃん、怒らせちゃ駄目だってば！怖い思いしたからってこの子に当たっちゃだめだよ。恥ずかしがってないでちゃんとお礼言わなくちゃ。あなたも女の子なんだからそんな乱暴な言葉使っちゃ駄目だよ。」

なにそれ？

さっきのって怖くて情緒不安定になってたって事か？

何その小動物的なの？

そういわれるとかわいく思えてしまう不思議。

それより女の子って僕のことですか？

マジで気づいてないのな。へこむはゝ OTZ

なのは「できれば本当の名前も教えて欲しいな？」

神谷「なんでまた？ 必要かいそんなの？」

なのは「必要だよ。お友達になるには。」

いやまあ名前も知らん奴に呼ばわりされたら、

何こいつストーカーか？

と思うだろうし、一方的に知られてるようで怖いが…。

ここで本名乗ったらアウトだろ。

なんか、それっぽい女の名前は……。

神谷「そうだな。僕のことには滯音^{れいん}とでも呼んでおくれ。」

アリサ「結局偽名なんだ？」

神谷「別によかろ？ それにこれは僕の魂の名前だ。」

ぶっちゃけ生みの親の名前です。はい。

かっこいいだろ。

残念ながら右手に赤い紐も黒銀の毛並みの犬もいないが…。

アリサ「はあゝ。まあいいわ。私はアリサ・バニングス。助けてくれてありがと。それとさっきはごめんなさい。」

神谷「かまわんよ。誰でも怖いもんは怖い。」

アリサ「そうありがと。よろしくね霽音。」

神谷「ああよろしく。」

すずか「それじゃあ行こうか？」

神谷「何処に？」

すずか「さっきおなかいっぱい食べたいって行ってたよね？」

神谷「いやあれはネタであってですね。」

アリサ「ちようどいいじゃない。私たちもこれから昼食だったし。」

無視ですか？まあそれもよからう。

なのは「私たちもなにかお礼したいし、一緒にたべよ。」

神谷「せっかくなのでゴチになりましょう。」

さらばカロリーメイト。お前の出番はなさそうだ。

ということで移動開始。

したんだが、

なんというか、見覚えのある風景が広がってきました。

嗚呼笑えない冗談だ。

神谷「なのはさんや。いったい何処に向かっとなるのかのう。」

なのは「いきなりおばあちゃんに!？」

アリサ「気にしたら負けよなのは。」

神谷「そいで?これからどこに？」

なのは「にゃはは。ええと、翠屋って言う喫茶店なんだけど。」

すずか「なのはちゃんのお父さんとお母さんがやってるんだよ。」

ナンテコッタ!!

士郎さんと桃子さんにはすでにこの姿を見られてるんだが…。

しかしここまできて抜けるわけにも逝くまい。

覚悟を決めろ!!

どうなるか予想もつかないが、逝けば分かるさ逝ってみろ!!

なのは「ただいま。」

士郎「おかえり。なのは。」

桃子「あら、お友達も一緒ね。」

なのは「新しいお友達もできたの。」

神谷「どうも。」

士郎&桃子「……………」

おや？ フリーズしおったわ。

そんなに予想外だったか？

なのは「どうしたの？」

士郎「えっ！ あっいや、なんでもないよ。」

アリサ「もしかしてお知り合いですか？」

なのは「えっ！ そうなの？」

士郎「まあなんというか。よくケーキを食べにきてくれる子だよ。」

桃子「そういえばまだ名前を聞いたことなかったわね？」

二人とも半笑いですな。ならば笑かして見せましょう。

神谷「滯音と申します。士郎様、桃子様。以後お見知りおきを。」

その場で回ってお辞儀してみせる。

士郎「ブハッ。」

士郎さん脱落ですな。

しかし桃子さん。アレを耐えるとは手ごわい。

神谷「なのはさんはとてもよくできた娘さんですね。関心ですわ。」

桃子「フフツ、ありがとう。あなたもとても素敵よ。」

アリサ「ちょっと。」

神谷「あら、どうなさいました？アリサ様？」

アリサ「アンタ何猫被ってんのよ。」

神谷「何を仰っているか分かりませんわ。」

アリサ「まあ別にいいけど…。」

はい！こうなれば自棄です。逝けるとこまで逝ってみよう。

士郎「とりあえずゆっくりしていきなさい。」

みんな「は〜い。」

お言葉に甘えてゆっくりしましょうか。

アリサ「つとそろそろ時間ね。」

すずか「そろそろ帰ろうか？」

神谷「そうですね。そうしましょう。」

やっと終わるか。長い一日でござった。

アリサ「じゃあなのは、また明日。」

すずか「バイバイ、なのはちゃん。」

なのは「バイバイ。」

これで任務完了っと。

すずか「あ、危ない!!」

なに!!!?なんだ?

ボール?間に合わない!!

ガシィイツ!!

目の前の光景が信じられなかった。

今まさにアリサを捉えようとしていたボールを

あのドンくさい高町なのはが防いでいた。

完全に死角から飛んできたものを…。

ありえない。

なのは「だ、大丈夫？アリサちゃん？」

アリサ「うん。ありがとう、なのは。」

アリサは呆然としている。

というか防いだ本人が一番驚いているな。

鍛えれば強くなりそうだな。

どうでもいいことか…。

だが面白い!! 今度試してみるか？

ちなみに

神谷「なあアビス。」

アビス「なんだね？」

神谷「見つかったら報酬減額じゃなかったか？」

アビス「その通りだが。」

神谷「なってないぞ。減額。」

アビス「クライアント曰く、見つからないからいいそうだよ。」

神谷「見つかってない？」

アビス「正確にはバレてない、になるのかね。」

神谷「いいのか？そんなんで？」

アビス「むしろ毎日女装で護衛してくれとオファーがきているよ。」

神谷「冗談じゃない。勘弁してくれ。」

女装なんか二度とするかよ！！

第八話 再会

情報が足りない。

先日のフェイトとの一戦以来考えていたことだった。

魔法についての情報が足りないのだ。

。今まではただ漠然と『魔法』を使って攻撃してくるのが『魔導士』

くらいの認識しかなかった。

だが実際、どんな魔法があって、どんな戦闘スタイルがあって、それを駆使してどんな攻撃を仕掛けてくるのか？

詳細な情報がまるでないのだ。

とりあえずは先生に聞くのが一番かな？
フェイト

第八話 再会

フェイト「魔法を教えて欲しい？」

神谷「うい。」

フェイト「別にいいんだけど…。」

フェイトが困ったような顔をする。

神谷「何か問題でも？」

アルフ「教わっても使えないかもって事さ。」

神谷「それなら問題ないよ。使いたいわけじゃないから。」

アルフ「どういうことだい？」

アルフが首を傾げながら聞いてきた。

教えて欲しいのに使わなくていい。

その矛盾に納得いかない様子だ。

神谷「言い方が悪かったかな？なら言い直そう。僕に『魔法について』教えて欲しい。」

フェイト「??魔法について？」

神谷「そう。分析というのは戦闘において重要なファクターだからね。そのためには情報が必要不可欠。戦^{タクティカルアドバンテージ}略的優位性を得るためってことさ。」

フェイト「つまりどんな種類の魔法があって、どういう戦い方をする人がいるか知りたいって事でいいのかな？」

神谷「そゆこと。どんな魔法が来るかなんて戦闘中に見てるだけじゃ予想できないからね。あらかじめどんなのがあるか分かれば、ある程度予測できる。予測できれば回避も防御も容易になる。」

アルフ「なるほどね。」

フェイト「それなら教えられそう。」

神谷「先生、よろしくお願いします。」

大げさな動きで深々と頭を下げる。

アルフ「なんか胡散臭い生徒だねえ。」

神谷「うっさいわ！」

フェイト「ふふっ、それじゃあ授業を始めますよ。神谷君。」

以外にもフェイトものってきた。だが、

神谷「顔が赤いぞ。」

フェイト「／／／／／」

自分でのっかってきて、照れちゃってますよこの子。

反則的なくらいかわいらしいです。

フェイト「コ、コホン…。じゃあ、魔導士の戦い方から説明するよ。」

神谷「逃げた!!?」

フェイト「まず魔導士は大きく分けて2種類。陸戦魔導士と空戦魔導士。これは別に説明しなくても分かるかな?」

スルーですか。先生。

フェイト「次にそれぞれ戦闘スタイルごとに、接近戦等を主とする近接特化系、中距離からの操作型、誘導型の魔法を使った空間制圧型系、範囲内の敵を殲滅する広域攻撃系。大体この3つが多いかな。ちなみに私はどちらかというと近接特化型。」

神谷「なるほど…。相手の動きを見て仕掛けてこようとする距離によって相手のスタイルが分かる訳だ。」

フェイト「相手の得意な魔法を見分けるならデバイスを見れば大体分かるよ。一番多いのは杖の形のデバイスだね。でも召喚みたいに特殊な攻撃方法はデバイスを見ただけじゃ分かりづらいかな。」

やはり触りだけ聞いても駄目だな。判断材料が必要だ。

もっと詳しく聞く必要有。

ということだ

ウルトラくわしく聞きました。

手抜き？否、説明だけでは退屈である。

フェイト先生の説明は実に分かりやすかった。

何でもフェイトにも魔法の先生が居たそうで、その人の受け売りだそうだ。

神谷「これで皆も魔法博士だ！！」

アルフ「誰としゃべってるんだい？」

神谷「気にしたら負けだ。お約束という奴だからな。」

アルフ「ふーん。よくわかんないけどわかったよ。」

とりあえず説明を聞いて分かったことがある。

陸戦魔導士は問題ないが、空戦魔導士は厄介極まりない。

というよりも飛ばれてこっちの射程距離外から撃ちまくられたら、

負けないかもしれないが絶対に勝てない。

だが、勝つ方法はいくつかある。

1、飛ぶ前に瞬殺する。

2、室内等に誘導してひっぱたく。

3、無理やり飛ばない状況を作り出してからアジャパーする。

とりあえず1は却下だな。

それができたら苦労しない。

自分と同等、あるいは格上の相手には通用しない。

それに、せっかく授業を受けた意味がない。

次に2だが…。

相手がバカならのってきそうだが、

普通に考えれば魔力弾と砲撃の雨霞で建物ごと潰されてアウトだな。

自分が優位に立ってるのに態々危険を冒す奴はいない。

となればとりあえず3しかない。

先ほど聞いたが、AMFという魔力結合を阻害するものがあるそうだが、

僕には今のところ使えそうにない。

魔法を使わないものが扱えるようになれば圧倒的に優位な状況を

作り出せるわけだが、時代はまだそこまで進んでない。

長生きしようぜ。

そこで、現在使えそうなものではないものの弦くらいだな。

現代日本には何もない平地などそうそうない。

ならば相手を封殺する檻を形成し、殴り合いのできる距離で戦えば五分以上の戦いをする自身がある。

まあ、結局やってみなけりゃ分からんって事だな。

フェイト「じゃあ、そろそろジュエルシード探索に行ってくるね。」

神谷「おう。気をつけて行ってきなさいな。」

アルフ「大丈夫だよ。それより運動してくるから夕飯は肉がいいね。」

神谷「おまいさんそればっかだな。」

アルフの肉好きにも困ったもんだな。

ドックフード食おうとしたときはさすがにびびったが…。

犬にでもなるつもりなのかコイツは!!??

もちろん全力で阻止した。

たしかに栄養価は高いし、人間が食っても問題なさそうなものがほとんどだが、

それは人道に反してるだろう。

神谷「そいでは早速夕飯の準備をおくつと……。買い物してないな。」

肉が無いぞ。

神谷「そうだ！狩りに逝こう！！」

.....

一人でやってても虚しいな。

買い物行くか。

たしか今日は中丘町のスーパーで特売やってたな。

何で知ってるかって？

主夫舐めたらいかんぜよ。

っと、アホな事いってないで出発しよう。

さーて、にゅく♪にゅく♪

むむっ!!

タイムサービスでしゃぶしゃぶ用の牛肉20%オフ!!

しかもラストワンではないか!!

頂!! もとい、頂き!!

肉確保のために手を伸ばすと、同時にもう一人の手がついた。

神谷「強敵^{ボス}出現か!?! っておや?

どこかで見た顔という、

神谷「僕の記憶が正しければ、貴方様は八神はやて殿ではござらぬか?」

最近は思わぬところで思わぬ人に会うのがはやってるようだ。

はやて「そうゆう貴方は石田先生のところのカミヤンでは?」

いきなり不幸少年呼ばわりか!!

たしかに名前的に違和感はないが、

神谷「カミヤンゆうな。別に不幸でもイケメンでもないわ。あれ? いやどちらかというと不幸な部類に入るのか?」

はやて「いやウチに聞かれてもわからんわ。でも自分で不幸やと思うんやったら、不幸なんとちゃうか? 要は自分の気の持ちようや。」

神谷「なるほど。一応言っておこう。はあ不幸だ。」

はやて「一応って…。」

神谷「それはそうと買い物か？車椅子じゃ大変だろ？」

はやて「そんなことあらへんよ。家も近くやし、みんな親切やし。」

神谷「それならいいが、困ったことがあればおいちゃんに言いなさい。こうして出会えたラッキーな貴方には特別に伝説の魔神を召喚する呪文を教えちゃいますぞ。」

はやて「ヤッハ♪シャンテン♪とかどうでもええから、それやったらメアド教えてもらったほうが建設的やわ。」

なんかいい友達になれそうだ。

神谷「そうかそれは残念だ。」

といつつとりあえず赤外線通信中。

はやて「カミヤンも夕飯の買い物か？」

カミヤン確定ですか。

神谷「そ。ハヤタくんもかい？」

はやて「そや。って誰が貧乏執事や！性別からして違うやん！あ、でも八神さんとか呼ばれるのも他人行儀でいややから、ウチのこと

ははやてでええで。」

他人行義か…。確かにそうかもな。

神谷「OKはやて。はやても自炊か？」

はやて「こう見えても料理は得意なんよ。」

得意げに胸を張るはやて。なんとも愛らしい。

神谷「ふむ。しかし目的のものが同じようだな。」

はやて「そうやね。」

神谷「そこで提案だ。ウチで一緒に食ってかないか？」

はやて「へ？」

神谷「へ？ではない。答えはYESかはいだ。」

はやて「究極の二択という名の一択やな。」

神谷「よしそうと決まれば。さっそく足の手配だ。帰りに一人は危ないからな。」

はやて「ちょー！おまー！」

さっそく足に電話だー！

side はやて

いきなりこんなところで会うとは、

正直びっくりやったわ。

それにしてもなんやとんとん拍子で話が決まってもうたわ。

まあ面白そうやからええけど。

神谷「私だ。車を一台回してくれ。」

なんかめっちゃ偉そうやな。どこの社長や？

神谷「ま、まって！！悪かった。僕が悪かったです。アホな子に生まれてごめんなさい。もう二度といいません。だから電話切らんでください。」

弱！！いきなり腰低すぎるわ！！

てか誰と話しとるんやろ？

神谷「実はかくかくしかじか四角いムーブで。」

はしよりすぎやろ。

神谷「ああ、よろしく頼むよ。母さん。」

石田先生やったんか。母は強しって奴やな。

神谷「さあいくぞ。はやて。」

おもしろいことになりそうや。

side out

神谷「ささ、パツと移動してまいりました。ここが我が家です。」

はやて「なんという日本邸宅!!ここは平安時代なんか!？」

神谷「いや内装はもうちょっと近代的だな。」

はやて「もうちょっとどれくらいや？」

神谷「太正くらいかな？」

はやて「それはちゃうで!架空の時代や!」

神谷「まあ立ち話もなんだからあがってくれ。」

はやて「じゃあおじゃまします。」

神谷「さて何を作るかな。しゃぶしゃぶだけでもいいがもうちょっと彩りが欲しいな。」

はやて「でもしゃぶしゃぶやったら凝った物よりサラダとかのほうが合うんじゃないか？」

神谷「それだとなんか手抜きくさくないか?愛が足りんだろ。」

はやて「そこはドレッシングでカバーすればええやん。」

神谷「なるほど。その発想はなかった。」

はやて「じゃあ方針も決まったところで」

二人「Cooking Start!!」

次回 はやてとの新婚？生活が始まる（嘘）

to be continued

第八話 再会（後書き）

今回は久しぶりにはやて登場。

どうしてこうなったのか。答えはかんたんですよ。

作者がトツテモ・ハヤテスキーだからです。

しばらく空気だったので出番を上げたかったんです。

というか今のうちに絡んでおかないと後から大変なことにWW

えっ？なのとも影薄いだって？

ごめんなさいOTZ

なのはの出番はもう少し後です。

それではまた見てギ〇ス！！

第九話 約束（前書き）

あゝ散々悩んで更新遅くなった挙句に短い。
なんてゝかもゝサーセン！！

第九話 約束

偉い人は言いました。

「キッチンは戦場である。（昔バイト先の店長が言ってた気がする。）」

そう、そこはまさに戦場…

神谷「あゝはやて。アレってアレ。」

ではなかった。

はやて「アレ？」

神谷「ほらアレがアレでアレだよ。」

はやて「あゝアレか？ はいアレ。」

神谷「あんがとさん。」

いやもはやでカオスである。

第九話 約束

神谷「ほいでは僕は材料の下拵えをしておくから、噂のドレッシングをよろしく。」

はやて「了解や。それにしても…。」

はやてがなにやら考え込んでいる。

神谷「どうした？」

はやて「この量、二人分にしては多いんやないかなあ…ってな。」

肝心なことを話していなかったことに気づいた。

神谷「ああ、四人分だから。」

はやて「四人？」

神谷「そっ。ウチには居候がいるからな。」

はやて「いまさらやけどうち迷惑なんとちゃう？」

神谷「そんなことはないさ。手伝ってもらってるし。」

はやて「ならええんやけど。」

神谷（アルフにも見習って欲しいほどの謙虚さだな。）

アルフ「たっだいま。」

フェイト「ただいま。」

噂をすればという言葉通り（噂はしてないが）になったか。

アルフ「ごっはん♪ごはん♪…ん？」

フェイト「えーと？はじめまして？」

はやてを見て大いに混乱しているフェイトたち。

神谷「ああ、まだ紹介していなかったな。妻のはやてだ。」

そこに容赦なく追い討ちをかける。

フェイト&アルフ「はい？」

はやて「シュウヘイ君の妻のはやてです。旦那がいつもお世話になってます。」

さらにボケ倒すはやて。

神谷（さすがの芸人魂。淀みないな。）

フェイト「あ、あの、こちらこそいつもシュウ…いえ旦那様にはお世話になっております…。」

神谷「はやて。この子がこの前話した子だよ。」

はやて「でもこんなかわええ子だなんて聞いてへんかったんやけど。」

神谷「ああ、言ってなかったからな。いい女だろ。」

フェイト「その、い、いつもご飯までいただいてしまつて。」

はやて「な！？まさか堂々と浮気する気か？」

フェイト「浮気だなんてそんな！！」

神谷「まさか僕が愛してるのは君だけだよ。はやて。」

はやて「シュウヘイ君…。」

神谷「はやて…。」

フェイト「あ、あの…。」

神谷&はやて「……………。」

フェイト「あう。」

神谷&はやて「VUHAAAAAAAA!!」

そしてこの爆笑である。

フェイト「え？」

アルフ「フェイト。からかわれてるんだって。」

フェイト「からかう？」

神谷「いやゝまさかこれほどとは…。」

はやて「ほんまにおもしろいわあ。」

アルフ「あんまりうちのフェイトをいじめないで欲しいんだけど…。」

アルフが苦笑いしている。

神谷「スマン、最初の反応があまりにも良かったからつい悪乗りを…。」

はやて「いやしかしネタでも愛してるって言われるのはドキッとするわ。」

神谷「それはよかった。半分本気だったからな。」

はやて「へ？」

神谷「半分冗談だ。」

はやて「なんや半分冗談か……ってやっぱり半分本気やないか／＼」

神谷「冗談だよ。」

はやて「100%冗談に!!!? 乙女心をもてあそぶなんて最低や!」

フェイト「そうだよシュウヘイ!最低だよ!」

アルフ「そくだそくだ。」

アルフもニヤニヤしながら便乗する

神谷「最終的には僕だけ悪者か？」

はやて「フェイトちゃん。」

フェイト「はやて。」

手を握り合い見詰め合う二人。

はやて「ほならあらためて自己紹介や。うちは八神はやていいです。」

フェイト「あ、フェイト・テストロッサです。」

アルフ「あたしはアルフだよ。」

はやて「フェイトちゃんにアルフさんやな。」

神谷「はやてとは最近知り合ったんだがとってもできた子だ。料理もできるし二人とは大違いだ。友達になるといいぞ。」

はやて「いや今のはおかしくないか？なんか恨みでもあるんか？」

神谷「まさか！はやてが手伝ってくれて大助かりだったな〜とか、あの二人はふらふらなにやってんのかな〜とかそんなこと思っただいぞ。」

二人「うっ。」

はやて「思いっきり思ってるやん。」

神谷「そんなことはないぞ。」

はやて「それはそうとフェイトちゃんはカミヤンの彼女さんか？」

フェイト「ち、ちがうよ／＼／＼」

神谷「なぜ、そう思われますか？」

どこかの司会者っぽい口調で聞く。

はやて「だって同棲やで。」

神谷「普通に考えればホームステイだろ。」

はやて「うまく逃げられたわ。」

はやてはつまらなそうに言う。

神谷「じゃあ彼女でいいわ。」

フェイト「えええ!!?」

神谷「このあと一緒に風呂に入っていちゃいちゃしてから…」

フェイト「お。お風呂!!? いちゃいちゃ!!?」

神谷「ベツトでおいしくいただきます。」

フェイト「アルフどうしよう。私食べられちゃう。」

アルフ「フェイト。多分そういう意味じゃないよ。」

フェイト「そうなの？」

はやて「まあ平たく言えばえっちいことするちゅうことや。」

フェイト「え、えっちいこと／＼／＼／」

はやて「せやで。カミヤンは結構経験豊富そうやな。」

神谷「百戦錬磨だぞ。」

はやての冗談に真顔で返す。

はやて「あれ？もしかして本気^{マジ}？」

神谷「ああ、本気^{マジ}。」

はやて「はは、それは予想外やったわ。」

若干引いているはやて。

神谷「僕の手にかかればどんな不感症^{マクロ}患者も全身性感帯だ。（”気”を使って触覚を敏感にするだけだけど）」

はやて「自信満々やな。」

神谷「実績があるからな。ということでフェイト今晚は楽しみにしときなさい。」

フェイト「は、はい／＼／＼頑張ります／＼／」

真っ赤になってもはや正常な判断ができないフェイト。

それを見て全員がこう思った。

何だこのかわゆい生き物は!!と

冗談を悉く真に受ける純粋さも然ることながら、

挙動のひとつひとつが愛くるしい。

はやて「フェイトちゃんしっかりしい!! こんな冗談で将来決めたらアカンで!!」

神谷「まあ冗談はこれくらいにして夕飯にしようか。」

アルフ「おおーごはん!! 早く食べようよ。」

神谷「もう準備はできてるぞ。今日ははやても手伝ってくれたからいつもと一味違う。」

はやて「ドレッシングだけなんやけどね。」

神谷「でも一番手間がかかってる。僕にいたっては材料を切っただけだぞ。」

アルフ「そんなことより早く食べようよ。」

神谷「はいはい。では皆さんと一緒に。」

「いただきます。」

「アルフにくくくくくく！」

神谷「野菜を食え。野菜を。貴様それでもヒューマンのつもりか？」

フェイト「そうだよアルフ。せっかくはやてが作ってくれたんだからちゃんと食venaきや。」

そう言いつつフェイトはもきゅもきゅと野菜をほおばっている。

神谷「そうだよアルフ。……む！？ほんとにうまい。」

はやて「なんや疑つとつたんか？」

神谷「いや疑ってはいないんだが正直ここまでとは思ってなかったな。しかしドレッシングひとつでここまで変わるとは……。最後に数滴入れたレモン汁の風味が生きてるな。」

「はやてどや？ 実力の差を思い知ったか！！」

神谷「ああ、実に勉強になる。僕はあまり手の込んだものは作れないし、そのうち料理を習いに言ってもいいか？」

「いつでもええよ。でもやるからには徹底的にやるで？」

神谷「了解した。相応の覚悟を持って望むとしよう。」

はやて「うゝん、今から楽しみやな。」

食事中に交わしたこの何気ない約束。

これが後に少年がとある事件に巻き込まれる切欠になることを…。

そして、二人を繋ぐ絆になることはまだ誰も知る由もない。

To be continued

第九話 約束（後書き）

とりあえずA，S編のためのフラグついでにいろいろ書いてみました。

妄想全開！！

読み返してみて思いました。

あゝ俺ってあほだなゝ

つと…。

第十話 協力（前書き）

集中力が続かずにはちまちましか書けない今日この頃。
来月からは尋常じゃないくらい暇なので更新速度がアップすると思
われます。

第十話 協力

あれからしばらくして、はやては母さんに送られて何事もなく帰っていった。

もちろんフェイトとアルフには隠れていてもらった。

母さんが若干興奮気味にいろいろ聞き出そうとしていたが、残念ながら母さんが期待していたようなことは何もなかったためか、

少々がっかりした様子だった。

何でも早く孫の顔が見たいそうだが…。

早すぎるだろ！常考！！

第十話 協力

翌日、学校で帰り際に委員長たちから妙なことを聞かれた。

アリサ「ねえ神谷君。フェレットの飼い方って知ってる。」

神谷「フェレット？イギリス製の装甲車の？」

予想を遥かに上回る返答にみな哑然としている。

なのは「そーこーしゃ？」

首を傾げるなのは。なかなかかわいいジャマイカ！！

アリサ「違うわよ！！」

神谷「違うのか？ならネコ目イタチ科イタチ属の肉食性哺乳類のこ
とかな？」

アリサ「何で先にそっちが出てこなかったのか謎だけど、多分そう。
」

もはや人生で何度目か数え切れないが、呆れられた。

神谷「ウサギ狩りでもするのかい？」

すずか「狩り？」

神谷「フェレットは元来狩猟に使われていた動物らしいから。人間
にも慣れやすいし飼い主と遊ぶのも好きだ。」

なのは「ふえ〜」。

狩猟動物と聞いて若干怯えている様子のなのは。

アリサ「狩りなんてしないわよ。」

神谷「しないのか？なら毛皮か？」

アリサ「欲しかったら既製品でも買ってくるわよ。」

意外とドライな反応だった。

神谷「まさか実験!!?」

アリサ「何の実験よ!!?」

神谷「バイオハザード的な。」

すずか「実験なんてしないよ。」

脱線しまくる会話にすずかも呆れ始めた。本当にこれでいいのこの人生。

神谷「じゃあ何に『使う』んだい?」

なのは「にやはは。なんていうか『使う』っていうのがもう違うと
いますか…。」

アリサ「最初に飼うって言ったでしょうが!!」

神谷「愛玩用……だと?」

本気で驚いた顔をする少年…

アリサ「むしろ他に道があったことに驚きよ。」

…に本気で驚く少女。

神谷「買ったのか？」

すずか「この前林道で怪我して倒れてる子を見つけたんだよ。」

なのは「それでウチで買うことになったんだけどどうすればいいのかわからなくて…。」

神谷「大丈夫なのか？飲食店だろうに…。」

なのは「それは何とかなりそうなんだ。」

なんとかなるのか？？

神谷「ふむ。ならば説明しましょう。」

アリサ「あっ、わかるんだ。」

神谷「もち。フェレットは頭がいいから比較的買いやすい動物だがいくつか注意点がある。」

すずか「注意点？」

神谷「そうそう。まず重要なのは温度管理。暑さに弱いから熱中症になりやすいんだ。」

アリサ「じゃああんまり日当たりのいいところは駄目ってことね。」

神谷「次に狭い隙間は塞いでおく事。彼らは狭いところを好むから電化製品の裏なんかは特に注意だ。齧られたりするからね。」

なのは「断線したら危ないね。」

神谷「最後にこれがある意味最も重要。愛玩用なら必須だ。」

アリサ「何？」

これが最大の…いわば問題だ。

神谷「雄か雌か知らんけど臭腺除去手術と《去勢》・避妊手術をしましょう。」

なのは「???」

すずか「まあ…。」

アリサ「大事よね…。」

二人は動物を飼ってるから一応分かるようだ。

なのは「きょせい？ひにん？ってみんなわかるの。」

アリサ「ウチは犬がいるし、すずかもネコ飼ってるからね。」

すずか「ペットを飼ってれば必ずある問題だからね。」

なのは「???」

アリサ「なんというか…『ある時期』になると気が荒くなったりするのよ。」

なのは「ある時期？」

神谷「簡単に言えば発情期にオスとメスがズッコンb「その先は言うんじゃなく〜い!!」……そう興奮するな。怒ると老化が進むというし。」

アリサの拳が光って唸る。

☆GO☆KI☆

アリサ「黙らないと殴るわよ!!」

神谷「いえす、まむ。しかしすでに殴っております大佐殿。」

なのは「にゃはは。もしかして聞いたらずいような事だった？」

すずか「そんなことはないと思うよ。ただあんまり話しやすい内容じゃないかな？」

神谷「ぶっちゃけ子作りだしな。」

アリサ「ちょッ!!?」

神谷「別に中学生になれば否でも授業で習うだろ。」

アリサ「私たち小学生なんだけど。」

神谷「でも知っていて損はない。」

アリサ「なんか損した気分になるわ。」

神谷「さくして話が脱線したがもうひとつの臭腺除去手術だが、」

三人（スルーした…。）

神谷「フェレットの仲間にも臭腺という器官が存在するわけだけど……結構有名な動物は『スカンク』という奴なんだがこれがかなりヤバイ匂いを発するのさ。」

なのは「ヤバイ匂い!!?」

神谷「自分の身に危険が迫ったときなどの興奮状態に陥るとワイドレンジの幅射波動よろしく圧倒的な空間制圧能力を発揮するんだ。まさに殺人レベル。」

アリサ「さ、殺人は言いすぎじゃない?」

神谷「死にはしないかもしれないが密室なら気絶くらいの可能性はある。」

ざわっざわざわっざわ……

神谷「ということで以上二つの手術は必ず実行しましょう。身の安全のためにも!!」

アリサ「そうね。」

すずか「そうだね。」

なのは「身の安全のため…。」

神谷「では今日の講義は終了です。そうゆうことで僕は帰る。」

変な空気になってしまったので逃げるが勝ちである。

その日の夜。

いつも通り料理をしていると、フェイトたちが帰ってきた。

フェイト「ただいま。」

神谷「ほいほいおかえり。もうすぐ夕飯だから手洗っといで。」

アルフ「はい。」

二人が手を洗っている間に配膳していく。

アルフ「おー！！今日もうまそうだね。」

神谷「そんなにがつつくな。料理は逃げないよ。」

アルフ「でも冷めちゃうよ。」

神谷「まあそうだな。それでは、」

みんなで「いただきます。」

いつものように食事が始まる。しかし、

神谷「ときにフェイトさんや。」

少年は気づく、

フェイト「なに？」

いつもと違うことに、

神谷「何でそんなに怪我してるのかな？」

フェイト「！！！…け、怪我なんかしてないよ。」

それは医師が見ても見逃しそうな微々たる物だったが、

少年にはわかってしまった。

神谷「本当に怪我をしてないならその反応はおかしいよ。それにさつきからあちこち庇いながら動いてるのが丸分かりだよ。」

少年は医術の心得もあったが、

怪我に気づいたのは混沌の中で身につけた戦術眼。

本来は相手の弱点を突くための眼。

神谷「後で『診て』あげるから今後怪我しても隠さない！！Do you Understand？」

フェイト「……うん。」

神谷「わかればよろしい。」

アルフ「でもよく気づいたね。」

神谷「まあちよつと動きに違和感があったからね。」

アルフ「でも気づいてくれて助かったよ。フェイトは無茶しがちだから。」

『無茶』という言葉に少年は反芻する。

いままで自身も散々無茶をしてきた。

それ故に目の前の少女を助けたい。

だが自分にも目指すべき目的がある。

その狭間で葛藤していた。

神谷「しかし、居候が毎日怪我をして帰ってきてもらっても困るかな。」

ため息をつきながらも少年は決心した。

神谷「僕も夜の散歩に付き合おうとしようか。」

二人「「え?」」

神谷「どうした?」

フェイト「だって！危ないこともあるんだよ！！」

神谷「だから？ちょっと前まで日常的に危ないことをしてたんだ。それこそ命に関わるような。問題ないさ。」

フェイト「で、でも…。」

神谷「悪いが拒否は認めないぞ。それにこれは僕自身のためでもあるんだから。」

不敵に笑う少年にフェイトは訝しむ様な視線を送る。

神谷「フェイト、アルフ。君たちがやっていることは正規の搜索活動ではないんだろ。」

フェイト「そうだよ。だから見つからないように、気づかれないように活動しなきゃいけない。」

神谷「それならいいのさ。そうでなくては…。」

フェイト「???」

神谷（そうでなくては『奴等』が出てこないだろうからね。）

アルフ「まあシュウヘイが強いのは分かっているから協力してもらえ
るのはありがたいね。よろしく頼むよ。」

神谷「まかせて。邪魔者は僕が殲滅してあげるよ。」

黒い笑顔を浮かべる少年。

二人は一抹の不安を覚えながらも少年の協力に感謝した。

神谷（『奴等』が出てくる前に腕慣らしをしておかないとな。それにフェイトの近くにいれば実際に魔法戦を間近で見られる。これは大きいな。）

少年はもうすぐ対峙するであろう敵に思いを馳せる。

少年の心の闇は広がっていく。

t o b e c o n t i n u e d

第十話 協力（後書き）

後半にほんとに久しぶりの微シリアス。
いまいち雰囲気でないですねW W

なんかおかしい！！とか
ちょっと見にくい！！とか
ご指摘ありましたらお願いします。

第十一話 兄妹仁義 前編（前書き）

あく難産です！！
しかも前後編に分かれました。

第十一話 兄妹仁義 前編

side フェイト

あれから数日。

私たちは今ジュエルシードの探索中。

正確には封印作業中だけど。

暴走したジュエルシードは今シュウヘイと戦っている。

始めて見る彼の実戦。

すごい。

ただそう思った。

何度か模擬戦していて彼の实力は知っているつもりだった。

そう知っているつもりだった。

そして今その認識が間違っていると気づかされた。

今の彼は別人だった。

普段の彼からは想像もつかない表情。いつもより精密な読み。

戦闘の経過が圧倒的な訳じゃない。

でも的確に攻撃をかわし、弾き、受け流し、決して直撃することはない。

そして、防戦一方かと思っているといつの間にか敵を追い詰めている。

彼は『強い』のではなく戦い方が『上手い』んだと思う。

などと考え事していると、すでに彼は敵を撃退していたので封印作業を急ぐ。

初めて会ったときは自分で封印していたけど、

あまり得意ではないみたいだった。

誰にでも得意不得意はあるみたいだ。彼も例外じゃない。

でもどちらにしても敵になったら怖いな。

第十一話 兄妹仁義 前編

神谷「どうしたフェイト？ぼくッとして…。」

フェイト「なんでもない。ちょっと考え事してただけだから。」

神谷「そうか。まあ無理はするなよ。」

そういつて彼は私を撫でた。

あったかい手が気持ちいい。

怖いときもあるけど、いつも優しくて頼りがある彼。

そして、私たちを家族だといってくれた。

私におにちゃんがいたらこんな感じだったのかな？

神谷「さて、今回の畜生はたいしたことなかったな。さっさと帰ろうか？」

そう、私にとって彼はもう家族だった。

フェイト「……………」

神谷「どうしたんだ？」

フェイト「あ、あのね…。シュウヘイは私たちのこと家族だって言ってくれたよね？」

神谷「ああ、確かに言ったし実際にそうだと認識してる。」

フェイト「そっか…。」

神谷「ほんとにどうしたんだ？なんか言いたいことがあるならおいちゃんに言ってみなさい。」

フェイト「父さん」

神谷「はい？」

フェイト「と、父さんって呼んでもいいかな？」

神谷「いや待て待て！！おいちゃんって言ったのが悪かったのか？それともそんなに老獪してますか？」

フェイト「あう。でも普段から頼りがいあって父さんって感じだし…。」

神谷「ごめんなさい。せめておにいちちゃんくらいにしてください。」

フェイト「お兄ちゃん？」

神谷「まあいいか。僕は妹属性はないけどフェイトが妹っていうのは悪くない。ほれ、妹よ！お兄ちゃんですよ。」

……これはお兄ちゃんって呼べってことなのかな？

フェイト「お、お兄ちゃん。」

神谷「…………。」

あれ？黙っちゃった？

フェイト「???どうしたの？」

神谷「あっ！いや…。すまんもう一回呼んでくれるか？」

?????

フェイト「お兄ちゃん。」

神谷「……意外といいかもしれん。」

フェイト「え？何かいった？」

神谷「いいえ。なんでもありません。」

なんか様子が変わけど…。

神谷「ホラホラ。いいからさっさと帰ろう。時間も遅くなったしな。」

なんかごまかされちゃったけど…。まあいつか。

フェイト side out

ちなみに…

神谷「なあフェイト。」

フェイト「なに？」

神谷「試しにパパって呼んでみてくれ。」

フェイト「え？うんいいけど…。」

神谷「さあ来い!!」

フェイト「ぱ、パパ？」

神谷「ヤバイ…これ最高かも…。」

フェイト「お兄ちゃん? どうしたの?」

神谷「あついやなんでもないんだ。なんでも…。」

帰り道にこんなやり取りがあつたりなかったり。

ところ変わって学校。

神谷「ふあ…。…………ねむ。」

アリサ「相変わらずやる気ないわね。」

予想以上の二重生活の辛さを味わっていた。

神谷「相変わらずは余計だよ。普段はやる気に満ち満ちてる。」

アリサ「嘘ばかり…。でも心配になるわよ。最近なのはも何か変だし。」

神谷「そうなのか?」

アリサ「何かいつもぼお／＼としてるし。無茶してなきゃいいけど。」

眠気から突っ伏していた体を起こす。

神谷「相変わらずなのは委員長のほうだな。」

アリサ「何処がよ。」

神谷「わからんのか？優しいおせっかいさん？」

アリサ「な、何よ！！？おせっかいで悪かったわね！！」

神谷「悪くなんかないよ。むしろいいことさ。人のために本気になる人間はそれほど多くない。その気持ちはとても尊いものだよ。大事にするといい。」

アリサ「そ、そう／＼／＼ありがとう。」

そういいながらなのはに眼を向ける。

確かに様子がおかしい。

まるで何かに考え事をしているような。

或いは何かに集中しているような。

声をかけられれば反応もするし、授業中も手を動かしているところを

見るとちゃんと聞いているようだが…。

いずれにしても学校にいる生徒としては不自然なほど

周りが見えていないように見えるとのことだった。

神谷「僕からもそれとなく聞いてみるよ。委員長みたいに仲が良すぎても相談しにくいこともあるだろうし…。」

アリサ「ありがと。悪いわね。」

神谷「困ったときはお互い様だ。」

アリサ「私は助けられてばかりな気がするんだけど？」

神谷「今のうちに山ほど貸しとく事にするよ。」

アリサ「あはは。後で何要求されるか恐ろしくて考えたくもないわね。」

神谷「そうだな。なら社長令嬢の権力で雇用してくれ。」

アリサ「社長令嬢どころか社長になる予定だから朝飯前よ。」

神谷「将来は平リーマンとして平和に暮らしたいね。」

アリサ「残念。アンタは私のボディガード筆頭よ。」

神谷「暗殺者どころか護衛対象に怯えながら暮らさにゃならんとは

…。」

アリサ「ふん！ウチに就職するなら一生こき使ってやるわ。」

神谷「なるほど。結ばれることは決してない愛する女性を一生守り続ける…」

アリサ「んな／＼／」

神谷「とかならまさに男のロマンなんだが…。相手がじゃじゃ馬ではロマンもなにもあったものじゃないな。」

アリサ「……………」

神谷「ん？どうした？眼が据わってるぞ？」

アリサ「アンタなかなかいい度胸してるわね。」

どこからか得物を取り出すアリサ。

神谷「あのくそれはどんな用途で用いるものなのでしょうか？とても禍々しいオーラを放っているのですが？」

アリサ「そんな乙女心を踏みにじる愚か者に制裁を加えるためのものに決まってるじゃない。」

神谷「そんな失礼な奴が何処にいますか？おっしゃいますか？おい！お嬢様に無礼を働いたのは誰だ！！？」

アリサ「覚悟はできてるんでしょうね？無礼者さん？」

神谷「お、お待ちください!! どうかその聖母のような広いお心でお許しを!! そんな始めて見る冗談みたいで冗談じゃない破壊兵器は勘弁してください!!」

アリサ「へえ。アンタには聖劍^{これ}が何に見えるのかしら？」

神谷「既存の名前が存在しませんがあえて言うならば見たまんま『釘ハリセン』です。」

アリサ「なんだあ。ちゃんとわかってるじゃない。じゃあ遠慮なく逝くわよ!!」

神谷「ちよつとは遠慮して!!」

そして、振り下ろされる狂気。

神谷「にゃ~~~~~!!」

その後のことはよく覚えていない。

ふと気がつくと自宅のベッドの上だった。

いつの間に模様替えしたのか枕の色が真っ赤だったのをよく覚えている。

そのことを翌日学校で話したら委員長が不自然なほど優しかった。不覚にも好きになってしまったところだった。

あんなに優しいお嫁さんがもらえればさぞ幸せだろう。

アリサ「あっ！そうそう明日すずかの家に遊びに行くんだけど、神谷君も一緒に行かない？」

神谷「いいのか？」

すずか「うん。せっかくお友達になったんだもん。一緒に遊ぼう。」

アリサ「まあ今回は『なのはの悩み事を聞こう！』っていう名目もあるんだけどね。」

神谷「ならお呼ばれしましょう。役に立てるかもしれないし。」

アリサ「なら決まりね！！」

その後、集合場所を決めてから解散となった。

ちなみに

肝心のなのはに声をかけることすら忘れてしまっていたのはご愛嬌だww

次回、『教えて神谷先輩』乞うご期待！！（果てしなく嘘）

t o b e c o n t i n u e d

第十一話 兄妹仁義 前編（後書き）

次回、ヌコ天国に領土拡大遠征を行います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9548/>

魔法少女リリカルなのは ～求めし非日常～

2010年11月29日10時54分発行